
夕日よ昇れ

琉兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日よ昇れ

【Nコード】

N9539U

【作者名】

琉兎

【あらすじ】

私立黎明学園に入学したばかりの北條朝貴は、なぜか生徒会会計に任命される。そして、会長に告白までされてしまう。戸惑う朝貴には忘れられない過去と自分の立場に揺れ動く。一応、生徒会長×会計（主人公）ですが、それ以外にもカップルが登場します。ですがあくまで本作では会長×会計が主体です。タイトル変更しました。

* 0 *

そう、これは僕のせい。

だから反論なんてできないし、もともと反論したって受け入れても聞き入れてももらえない。

僕は一体何なの？

あの人は僕のことを何とも思っていない。

人間以下ゴミ以下。

それ以上などありはしない。

いつも僕は最低値。

いつもいつも

僕は劣ってる

言うことなんて何もない

ね、だからうなずくしかなかったんだよ。

「はい・・・僕、ほっしょうあさき北條朝貴は今年からしりつれいぎやうがくえん私立黎暁学園に、入学させて

いただきます。」

外に出れるのはうれしいけど、今は出たくなんなかったよ・・・

*** 1 * (前書き)**

今度の作品はひたすら恋愛で行きます。

ほかCP要素もあるので、まあ、そちらの方も楽しみたいだけたらと・・・

＊１＊

県内にある中高一貫の黎明学園。文武両道なその学園は生粋の（？）男子校なのである。広大な敷地には、高等部だけでも校舎が三棟、グラウンドが三つ、体育館が四つもあった。さらに大きな寮の建物もある、別名お金持ち坊ちゃん校である。そこに今年から通う事になった、北條朝貴は寮の最上階にある生徒会専用階にある自室で目覚まし時計をこれでもかたたいて止めた。いや、実際にはそんなに力を入れてはいない。

「ふぁ・・・もう朝か・・・。今日は全校朝礼あるから、早く行かなきゃいけないんだよね。」

今日の予定を思い出しつつ、そうつぶやきながら朝貴はベットから抜けて、リビングスペースを素通りし、洗面所に向かった。蛇口をひねり、冷たい水を手で受けて思いっきり顔を洗う。ようやくさっぱりと目が覚める。朝食用にパンをトースターにセットし、その間に制服に着替える。黒字にところどころ白のラインが入ったブレザーに、黒のズボン。学年別に違うネクタイ——１年の朝貴は赤——を締める。そうしているうちにトーストが焼きあがる。それをさらに載せて冷蔵庫からいちごのジャムを取り出したつぷり塗りたくる。そしてそれにかぶりつきながら牛乳をコップに次いでトーストと一緒に流し込んだ。

「ごちそうさま！さて、そろそろ行かないと。準備もあるみたいだし・・・。」

今日の準備を終えた鞆をつかんで、朝貴は自室を飛び出した。ちなみにドアはオートロック式なので、鍵をかけ忘れるなどはない。鍵

を開けるときは学生証兼財布兼鍵のカードをセンサーにかざせばガチャッと開く。朝貴はエレベーターホールにつくと、三つあるうちの一つのエレベーターの下向きの三角ボタンを押した。オレンジ色の光がつき、エレベーターが来るのを待つ。するとそんな朝貴の後ろからばんと背中を叩いてきた人物がいた。

「はよ！今日も早いな朝貴！」

「いったあい……うう……青葉先輩おはようございます……」

にひひひつと笑ってにこやかにあいさつしてきたのは明るい茶髪にいかにもスポーツマンって感じの2年生、青葉^{あおば}淳だ。一応（？）生徒会書記をしている。茶色いやや長めの癖っ毛。屈託のない笑顔を常に絶やさない、後輩からも先輩からも好かれるそんな性格だ。ちなみに2年生はネクタイは緑である。そんな先輩はいま朝貴の頭をこれでもかとぐりぐりしている。

「先輩！縮んじやうんでやめてください！！」

「大丈夫だつて、これ以上ちびにはなんねーよ。」

「なりますよ！！そんな上からぐりぐり撫でつけられたら！！」

うう……165センチと182センチじゃ15センチ以上も差があるんだぞお！！しかも先輩バスケット部入ってるから筋力とかあるし！悔しいなあ！絶対に追い抜いてやるんだもん！！

「ま、朝貴はまだ1年なんだし、これからもしかしたら伸びるかな！」

「もしかしくなくても伸びるんです！！毎日牛乳飲んでるんですよ！」

「乳臭いガキだつて言われねーようにな！」

「むう……にしても……先輩今日は早いですね。いつもなら

遅刻すれすれの会長といい勝負なのに・・・。」

「まあな！あの会長直々に昨日部屋までこられて遅刻すんなんて言われたからな！でも・・・その会長がまだならもう少し遅くてもよかったかな。」

「もう来てる。」

「え？」

「お。」

そんな声と共にふらりと現れた人物こそ、この学園の生徒会長、近衛清桜^{のえせいあう}だった。眠たげに目をこすりながら人口ものの薄紫色の髪の毛をぱりぱり掻いている。やや右側が長いのは数本のエクステをつけてるからだ。朝貴は最近知った。三年である清桜は青色のネクタイを締めている。

「珍しく早いっすね、会長！」

「おはようございます、かいちょ・・・うぎゃああああああ！？」

「うあ・・・やっぱ無理・・・朝貴いなかったら今頃寝てる・・・。」

だからって・・・だからって抱きつくのやめて——！！何考えてるんですかこの人は——！！

「淳、お前朝貴に近付かないで、触らないで。」

「俺、後輩とのスキンシップは大事にする派なんすよ。」

「朝貴は俺の。」

「ぐえ・・・だから・・・会長・・・ぐるじ・・・。」

ていうか、いつから僕は貴方のモノになったんですかね！？なってないですよ！イケメンだからって調子にのっちゃだめですよ！

「朝から騒がしいと思ってたら・・・朝貴関係ですか？」

「！榊原先輩・・・助けてくださいー！」

とここで救世主現る。朝早いというのにきつちり身支度を整えた彼はこの生徒会最後のメンバー、副会長の榊原良介である。なにかきはらりようすけ清潔感ある黒髪に知的そうなふちなし眼鏡。同じ黒髪を持つ朝貴でも、朝貴のは癖っ毛のふわふわヘアーなのであは見えな。どっちかって言うときより幼さを引きだててると思ってるのだ。そんな感じで現れた良介はにつこりと笑いながら三人の傍を通り過ぎ、丁度来たエレベーターに乗り込んだ。

「さ、置いてきますよ？」

「ちょ・・・。」

「わぁー、待ってくださいー！！」

「そりゃないっすよ。」

三人も慌ててエレベーターに乗り込んだ。

*** 1 * (後書き)**

初回からキャラ出てきすぎでしょうか。

主人公は朝貴です。

* 2 * (前書き)

なんか名前で書いてたり、名字で書いてたり、一括性がないですね・・・。

清桜は基本清桜か、会長。

榊原は、榊原か良介。

青葉は淳。朝貴にだけ青葉先輩。

朝貴は朝貴w

朝貴は基本先輩付で呼ぶんですけど、清桜だけは会長なので、清桜はすこしくやしがつてますねw

エレベーターの中で、良介が清桜に今日の朝礼の予定変更を伝えていた。四人の男子高校生が乗っても、息苦しくなくさらに十人は楽々入れそうな広さがあるのだ。

「清桜、今回の朝礼、風紀委員から夏服移行の話があるそうなので、十分ほど時間を取ってほしいそうです。」

「いまさらそれを言うってくる普通？」

「俺に言わないでください。俺だって先ほど知ったんですから。」

「あんな奴らのためにそんな時間取れないね。校長の話を引きのばすか。」

「それは勘弁してくれないっすかー？聞いてるだけ寝眠くなるんすよ？」

うげえと、淳が清桜の言葉に過剰反応した。まあ、それは全生徒共通の反応だろう。

「俺も同感だけど、仕方がないだろ？」

「そんなに風紀委員の話嫌なんですか？」

「話自体はいい。けど、委員長は気に入くない！」

そこ！？どんな人なのかな・・・風紀委員長さんって・・・三年生だよな確か。あったことないんだけど・・・。

「絶対かかわっちゃだめだからね！朝貴わかった！？」

「え・・・なんでですか？」

「あんな危険人物にあつたら、朝貴一発で食われるもん！」

「くわっ!？」

なにそれどういういみ!? 食われるって・・・ええっ!? まさかそ
っちの意味? あ、ちなみにこの学校は同性愛というのが普通にある
んだけど。そりや入学したての時はびっくりしたよ。チューしてる
とか普通にあつたからね。抱き合ったり手つないだりとかはもう日
常風景って感じ。だから・・・うん、食われるってそういう意味の
事で間違いないんだろぅな・・・。

「朝貴は人気あるもんなあ！」

「青葉先輩？」

「そうそうー。俺が見込んでるだけあるでしょー? ね、朝貴！」

「なんで笑顔で僕の方来るんですか!? 狭いんで(せまくないけど)
あまりこつち来ないでくれると嬉しいんですけどっ!！」

「えー、そこは少しサービスしてほしいんだけどなあ。さーって、
そろそろ外に行かないとね。」

「今日もすごいでしょうね、特に清桜、貴方が・・・。」

「いやいや、最近淳にぬかされそうなんだよね。」

「俺なんてまだっすよ。榊原先輩もすごいじゃないっすか。あ、で
も今一番増えてんのは朝貴か。」

「僕!? って・・・何がですか？」

「そりや朝貴は可愛いもん。にしても・・・それはゆゆしき事態か
も・・・むう・・・うかうかしてたら、朝貴はだれかに取られるか
・・・。」

「だからどういう事ですか？」

一階に着いてエレベーターのドアが開いた。玄関まで数メートル。

「俺らってそれぞれに親衛隊があるだろ？」

「はい。」

「それってまあ、顔がよければ誰にでもつくわけよ。ま、顔だけじゃだめだけどね。」

「しかも何かしらの組織に入ればもれなくできる。つまり……。」

「

「不本意だけど朝貴にも出来てるってわけ……。」

「ええっ!？」

清桜の最後の言葉は、玄関を出て現実のものだという事がわかった。ここは男子校なのに、聞こえるのは黄色い声。それが寮から校舎へと行く道の三分の一の距離まで聞こえるのは、その両脇にそれぞれの親衛隊のメンバーがいるからだ。その中に、朝貴は自分の名前を呼ぶ声を聞いた。はつきりとだ。

「うつそ……。」

「ほらね。うーん……今抱きたいと言った奴できてほしいなあ。誰の朝貴に向かって言ってるのかなあ？」

だからあなたのじゃないですよ!!むしろ誰のものでもないですから!僕は僕の!って何言ってるんだ僕!

「でも、1年であれだけの親衛隊できるのは最速っすね。」

「生徒会に入ってしまったしね。それでも清桜よりは幾分か遅いですけど。」

「あれ、そうだったけ?俺覚えてないやーあはは。」

「笑いごとじゃない気がしますよ……。」

1年生で、生徒会会計。北條朝貴の波乱万文学園生活はまだ始まったばかりなのでした!

*** 2 * (後書き)**

はい、こんなお決まりな設定で書いていきますので。

* 3 *

生徒会メンバーの四人は、それから朝礼準備のため揃ってグラウンドの一つに向かったのだが、その途中で何かを思い出した朝貴が大声を出して立ち止まった。それにつられて他の三人も立ち止まる。

「どしたの、朝貴。」

「す．．．すみません。僕今日、日直で．．．朝教室の鍵取りに行かなきゃいけないの忘れてました！．．．あの．．．ちょっと遅れても良いですか？す．．．すぐ戻ってきますから！」

「いいよー。いつてらっしゃーい！」

「会長！ありがとうございます！じゃ、いつてきます！」

ぺこーっと頭を下げた朝貴はそのまま校舎へと向かって行った。

そんな彼の姿を清桜はにとほほ笑んで見送っていた。

「会長、また顔ほころんでるっすよ．．？そんなに朝貴好きっすか？」

「淳にはあの子の良さが分かんないんだよ。だまって静香君だいいじにしてなよー。あと、さっきの仕返しに静香君に朝貴に浮気してたって言っとくから。」

「それマジ勘弁して下さい！！」

「二人とも、さっさとグラウンド行きますよ。」

「うい。」

「ほーい。」

良介に先導されて、清桜達はグラウンドへと向かった。

その頃朝貴は、職員室で取ってきた鍵を持って自分のクラス1-Bに向かっていた。そして教室に着いて、がちゃんと鍵を開けてドアを開き中に入った。そして鍵を指定の位置に置き、一晩閉ざされていた窓をすべて開放する。朝の新鮮な空気が、こもった空気を押しやって中に入り込む。

「んっ……きもち……。さーって、準備に行かなきゃね。」

最後に日誌を机の上に置いた朝貴は、グラウンドに向かうため教室を出て廊下を歩く。校舎内は走っちゃだめだからね。でも、その守れないことが起きようとは、その時の朝貴は知らないのだった。

この学校の校舎は結構特殊な作りになっており、あちこち入り組んだり、まるで迷路状態なところもあり、なれてない人は迷子になる可能性もある変な校舎だった。入学して3カ月ほどがたつてようやく朝貴はなれたところである。そんな廊下を歩いていた時、十字路の廊下に差し掛かって、右側の廊下から足音が聞こえてきた。思わず朝貴はそのほうを見て、ばつと顔をそらせた。

その方から歩いて来ていたのは、ネクタイの色が青色であることから三年生であると思われた。一人は輝かん金髪。もう一人は茶髪だ。そして、その二人が運悪く朝貴の存在に気がついてしまった。

「あつれ、そこにいるのはもしかしてー？」

「お、会計の朝貴くんじゃないか。一人でどうしたんだい？」

「迷子だったりしてー。」

「なるほどなあ、一年じゃ迷うよな。どうだ、親切な俺らが案内してやるから、ちょっと付き合えよ。」

「だ、大丈夫ですから！別に迷ってなんかないですから！ていうか、

その手口この前も一緒でしたけど!!」

「あは、覚えててくれたッぽいよ!。」

「まじ。じゃ、もっと忘れられないようなことしてやるっか。」

「っ・・・・・・・・。」

そして、朝貴は気がつけば全力疾走していた。

*** 3 * (後書き)**

朝貴ピンチです！

捕まればもれなく朝から・・・
にげてー！朝貴逃げてー！なーんてw

あと、清桜が言ってた静香君っていうのは淳の恋人。もちろん？男の子ですが。

* 4 *

はあっ・・・・・・・・・・はあっ・・・・・・・・・・。

とてつもなく広い校舎の中を、一人が逃げ、二人が追い掛ける。もう、朝貴の脳裏に、校舎内は走っていけないの校則は消え失せていた。とりあえず逃げねば、自分の貞操その他もろもろが危険なのだ。でも、これ以上走ってもいられない理由が朝貴にはある。

「も・・・勘弁して下さい——！！僕なんか追っかけても・・・何の得もないですよ——！！」

「なにいつてんだー！いいことだらけだから、大人しくつかまれ——！！」

「そうだそうだ！」

「いやあああああああああああ！！」

だめだ・・・・・・・・このままじゃ・・・走れなくなっちゃうよ・・・・・・・・。

朝貴はキツと前を見つめてひととき複雑な構造になっているところに駆け込む。右へ左へ、もうどこをどう走ったかわからないほどになつてきている。その複雑さからか、追い掛けてきていた先輩達とはいくらか距離が出来ていた。

「っ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・っ・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・・・わあああ！！？」

足がもつれて、朝貴は盛大にその場に転んで倒れた。

「いたたたた・・・・・・・・・・。っ・・・・・・・・・・うつそ・・・・・・・・・・やだ・・・・・・・・・・足、動か

ない・・・やだ・・・これじゃ・・・つかまっちゃうよ・・・。

朝貴にはとある問題があった。それは長い間や、無理な運動をする
と足が動かなくなるのだ。それは幼少の頃でた高熱によるもので、
このせいで体育の授業はそんなに出れないのだ。朝貴はなんとか、
立ち上がるうと足に力を入れるが全く動こうとしない。徐々に近付
いてくる足音に、朝貴はパニック寸前だ。

「誰か・・・たす・・・助け・・・。」

だが、こんな辺鄙なところに朝貴を助けてくれるものなどいないと、
脳の片隅で思っていた。迫りくる足音にもう駄目かと諦めたその時、
ふわりと身体が浮き上がった。

「っえ・・・。」

「だまつてろ。」

頭の上で声がする。どうやらこの声の主は朝貴は抱きかかえられて
いるようだ。顔を见ようと顔を上げようとしたのだがその声の
主が急に移動し始めたためそれは叶わなかったのだ。

そして朝貴が抱えられたまま隠れたのは近くの空き教室だった。ド
アの死角になっているところで床に下ろされそのまま後ろから密着
されて、身動きとれないように隠れている。まあ、足がまだ動かな
いのでどこにも行けないのだが・・・。そして数分後にその教室の
前を通り過ぎていく二つの足音を聞き、朝貴ははあっと安堵の息を
吐いた。

だが、まだ安堵するには早かったのかもしれない。

首筋にぬつとした感覚を感じ、朝貴はぴくんと体を震わせた。

*** 4 * (後書き)**

ふむ・・・熱出して足になんか出るとかあるんでしょうか・・・。

あまり深く突っ込まないでください。なんとなくそういう設定ほし
いと勝手につけただけですわ

さて、次回少し微エロ？微微微微微エロwがはいるかもです。

*** 5 * (前書き)**

微工口・・・というよりなんかそんな感じの話してるっただけですw

ようやく来ましたよ、この話で一番の危険人物がつw

* 5 *

首に這うその感覚の正体が、その助けてくれた人の舌だと気づくの
にそう時間入らなかった。

「な．．．に．．．っん．．．．．」

足に力が入らなくて、そのせいで押しのけることもできなくて。朝
貴は必死にもがいた。だがそれも空しく一気に首筋を上がつてきた
舌の感覚に朝貴の身体は最大限に震えあがった。

こ．．．こんなこと．．．あの会長にもさせたことないのに．．．
．．．なんなのこの人は！！

ようやく後ろにいた人物は朝貴から離れた。朝貴は腕を使って身体
を引きずりつつその人から、出来るだけ離れた。そしてようやくそ
の人物を見た。金髪は肩に掛かるほど伸ばされ、まるでライオンの
たてがみのようになっている。そして綺麗な青い瞳はいたずらを仕
掛けた子供のように笑っている。

「貴方．．．誰なんですか．．．！？なんで．．．こんな．．．
助けてくれたのには．．．お礼を言いますけど．．．でも．．．な
んでなめ．．．っ．．．」

「何となく。反応見てみたかっただけさ。一年で会計に任命された
奴の反応ってやつをよ。案外うぶな反応見せるじゃねーか。まだ会
長とヤツてねーのかよ。」

「ヤルって．．．なにを．．．」

「キス以上の先の事。知らないほどお子ちゃまなわけでもないだろ

「？」

「っ・・・なんで僕と会長がそんなこと・・・。」

「はあ？お前と会長デキてるって噂だぜ？」

「できっ！？」

誰そんな噂流してるのは——！？ただの先輩後輩だから！

！んもう・・・あの会長が毎日毎日僕のこと好きとか言うからあ・・・っわあ！？

心の中で一人怒ってた朝貴のあごを、クイツとその金髪の先輩は持ちあげて上を向かせた。

「そーいや、お前は俺のこと知らないのか？」

「知りません！」

「くすっ、強気な奴。俺はな、お前の彼氏とおんなじだよ。」

「彼氏って誰ですか！！」って・・・同じ・・・？」

「俺の名前は、峰城龍弥。みねしろりゅうや風紀委員長だ、よろしくな。」

ふ・・・え・・・えええええ！？風紀委員長——

——！！？

「あ・・・あの・・・会長が・・・言ってた・・・危険人物・・・。」

「あの野郎。俺をそんな風に言いふらしやがって。ここでこいつ犯すぞ。」

「っ！！！！？」

く・・・食われる——！！！！！！どうしよう！！

「にしても、あの会長が自分のモノにした奴にまだ手も出してねー

なんてな。」

むっ……だ——か——ら——！！！！

ぱしつと朝貴は龍弥の手をはたいた。思わぬ朝貴の行動に、龍弥は目を丸くしている。いつの間にか力が再び入るようになっていた足で立ち上がった朝貴は、しっかりと龍弥に言い放った。

「僕は会長のモノでもなんでもないし、誰かのモノになんてなるつもりもみじんもないです！！」

僕は僕だ。

しばし驚いていたようだった龍弥だったが、にやつとわらうと朝貴を思いつきり引きよせ、耳元に口を近付けて囁いた。

「余裕ぶっこいてんじゃなか。だったら、俺は必ず、お前を俺のもんにしてやるから、覚悟しとけよ。」

最後に、朝貴の耳のふちを舐めるのを忘れない。一気に足の力が抜けた朝貴はその場にしりもちをついた。

なななななな………なんなんだこの人はああああ！！！！？

顔を真っ赤にし、耳を押さえながらそう思ってる朝貴を横目に、龍弥はその部屋を後にした。

*** 5 * (後書き)**

いっそ食われてしまえw

なんてね。

龍弥が一番書きやすいです。

*** 6 * (前書き)**

朝貴は結構いいことはずば言えるキャラです。

こつこつ子は書いてて楽しいですwはい、ただそれだけです。

朝貴がふらりふらりとグラウンドに来たのを、三人が見たのは朝貴が風紀委員長と出会ってから十分後、朝礼まであと五分という時だった。

「朝貴、遅かったから心配したよ。．．．どうかした？」

清桜が、朝貴の様子に気がついて顔を覗きこんでくる。

「いえ．．．なんでもありませんよ。それより．．．もう準備ほとんど終わっちゃってますね．．．すみません。」

「良いんだよ別に。朝貴は最初からそこらに座っててもよかったんだし。」

「会長ー、朝貴を甘やかしすぎだと思うつすよー！」

「うつさい！．．．ほんとになにかあったんなら、俺に言ってよ？」

「．．．はい．．．でも、なんでもありませんから。ちよつと校舎との往復につかれちゃったかなってくらいですから。」

「そう、あんま無理しないでね。」

「はい。」

なんだかんだいってこの人はこういう一面もあるのだ。この人はほんとに僕の事が好きなんだそうだ。それを知ったのは、僕が入学したその日。いきなり会計に任命されて、生徒会室で明かされた。でも．．．僕はよくわかんないんだ。今まで一度も誰かの事好きになつたとかないから．．．。会長は会長なんだよね。僕の中じゃ．．．。

で・・・僕は忘れてたわけですよ。またあの風紀委員長に会う事になってるってことを。

まあ、実際に対面するわけじゃないけど・・・なんで壇上に上がる時ちらつと僕の方を見てくるのかなああの人は！！思わずぞつとしたんですけど！？しかも、にやって・・・にやって笑うのはなんなのー！？

「あんの・・・風紀委員長めえ・・・。」

そうつぶやいたら隣にいた淳に聞こえたようで、朝貴の方を見ている。

「朝貴、風紀委員長あの人だって知ってたのか？」

「最近・・・ほんとについて最近知りました！知りたくもなかったですけど、知っちゃいました！」

そんな朝貴の言葉に、淳は首をかしげただけだった。そして、その後朝礼はすんなりと終わり、朝貴達も後片付けを済ませ、自身の教室へと向かったのだった。

「はよ、朝貴。朝からすっげー人気だったな。もってもて！」

「男にだけどね・・・おはよ、恵一。」

教室に着いて一番に声をかけてくるのは、この学校でも珍しくノーマルなそれでいて友達の及川恵一である。おいかわけいいち特に朝貴に黄色い声を上げることもないので、朝貴が気を抜いて接していられる。

「朝から散々な目にあつたから、もう疲れたよ。」

「これから今日だぞ？」

「わかってるよー。」

そう、今日という日はまだこれからなのだ。

*** 6 * (後書き)**

最後に出てきた朝貴の親友及川くんは、文中でも言っている通り、ノーマルですので、ほぼ出番はありませんwごめんね、及川君。

*** 7 * (前書き)**

さて、いろいろ行事へと話は移っていきましょー！

さて、初夏の日差し照りつける季節となったある日の生徒会室である行事の計画がなされていた。生徒会室にはもちろん生徒会メンバーがそろって自分の席に着き、会長・・・ではなく副会長の良介がホワイトボードに今回の行事、『修学旅行』という見出しを書いた。

「全学年で修学旅行ですか・・・。」

一般常識では、修学旅行は普通2年生の行事であることが多い。だが、この黎明学園は毎年全学年そろって修学旅行に行くのだ。つまり、在学中三回いくことになるらしい。それも決まって国内ではなく海外なのとか。さすがお金持ち学校と言ったところだろうか。去年もこの学校にいた清桜や、良介、淳はなれた感じがあるが、今年入ったばかりの朝貴は驚きを隠せない。

「そ。去年はどこだっけか？イタリア？バリ？」

「カナダっすよ。」

「今年はフランスです。日程は昨年同様、三泊四日。すでに飛行機やホテルの予約はすんでいます。あとはそれぞれの日程割ですが・・・。」

「クラスごと班決めてもらえばいいでしょー。つかめんどくさいしねー。」

「清桜・・・・。まあ、去年もそうでしたから今年もそうだと思いますが・・・。さて、では各自の仕事を言います。清桜貴方は修学旅行の日程調整を。」

「だる・・・・わかったよやるよ!..!」

良介に恐ろしい笑みを向けられ、清桜は慌てて頷いた。

「淳は・・・清桜のフォローをしててください・・・。」

「会長のお守っすか？」

「ちよ、それどういうこと！？なら朝貴が良い！！」

「僕！？」

「朝貴は会計として今回の旅費もろの計算してもらうのでだめです。それに、朝貴をフォローに着けたら貴方は仕事しないでしょーに！俺は各クラス配布用の書類その他書類の作成等々。さ、急いで取り掛かってくださいね、特にその二人！」

良介の指示で、生徒会は早速活動を開始した。ホントにしつかりした副会長である、良介のおかげでこの生徒会は運営されて行っているのだ。朝貴は良介に旅費や修学旅行に掛かる費用が書かれた書類を受け取り、それをひたすらパソコンに打ち込んで平均を出したり合計を出したりしていく。やる前はブー垂れていた清桜と淳だが、今はそろって真面目に仕事をする。ここには根っからのふまじめはいないのだ。やる気を出せば、皆できる人間がそろっている。やる気を出せばの話だが・・・。

「そーいえばさ、今年もやっぱこのメンバーで過ごす？ま、去年は朝貴いないけどさ。会計、卒業したし。」

「まあ、そのほうがいろいろ都合いいですから・・・。」

「ふえ・・・クラスじゃないんですか？」

今まで普通にクラスの人と班組むのか、と思っていた朝貴は清桜と良介の会話に入りこんだ。

「朝貴ー、考えても見てよ。毎朝毎夕、キヤーキヤー言われてるんだよ？そんな俺らが普通にクラスの人と班組める？」

「特に会長とか副会長は取りあいになるな。」

「あ……なるほど……。」

「それにくらべたら、このメンバーならそんなこともないですからね。俺らも安心して観光できますよ。」

「もしかして朝貴、クラスの友達とがよかった？ならそれでもいいけど……。」

「え……いや別にそんなわけじゃ……。」

正直、友達少ないんで。うん、恵一としかあんましゃべんないし・・・何か見られてる気がしないでもない。だから正直、クラスで班に入れるか不安だったのもあるから、ちょっと安心してた。

「じゃ、この四人で遊びますか！」

「俺達は遊ぶだけじゃなく、違反がでないように監視もしてなきゃいけませんけどね。」

生徒会や風紀委員などは修学旅行だからと言って羽目を外しすぎる生徒がでないよう監視するという仕事がある。だから出来るだけ生徒会や風紀委員は固まって班になった方が良いのだそうだ。

「俺らも普通に過ごしたいよ、ね朝貴。」

「だからいちいち僕に同意を求めないでくださいよ。でも、僕楽しみです。初めてだし、海外。」

「え、朝貴海外旅行とかいかなーの？」

「旅行とかあんまりする方じゃないですから。」

これは半分ほんとの事。朝貴はこれまでほとんど家から出してはもらえなかった。昔は病弱なため家から、自分の部屋から出られなかったのもあるのだが、出られるのは唯一こんな風に学校に通うときだけで、全寮制の学校に入れるとは朝貴自身思ってた。ずっ

とあの忌まわしい家に囚われ続けるとばかり思っていたからだ。まあ、この学校に入学したのも、あの人の陰謀が垣間見えるのがバレバレなのだが。だから、朝貴は少しでもいろんなところに行けると言う事だけでうれしかったのだ。

再び彼らは作業を再開した。ひたすら数字に向き合っている朝貴を清桜は陰ながらに、どこか思わせぶりな表情で見つめていたが、フツと笑って再び視線を書類に戻した。

*** 7 * (後書き)**

誤字脱字、その他何かありましたらお知らせください。

私は生徒会とか委員会とか入らなかった人なので、あまりこういうのは詳しくないんですが・・・こういう感じかなーっという風に書いていこうと思います。

そして、時は流れ修学旅行初日。朝貴達は無事パリの空港に降り立った。空は綺麗に晴れて雲ひとつない晴天。空港で解散し後は決められた班ごとで行動する。この黎明学園はお金持ちがほとんどで海外旅行なんてして当たり前だし、家の事情で何ヶ国語も話せる人もいるから、特に困ることはない。何かあっても高校生なんだし自分で解決しろというなんとも無責任な理由もあるのだ。朝貴達生徒会は、風紀委員と一か所に集められ、先生から二つ三つ話があった後にそれぞれ分かれた。

朝貴達四人は一応他の生徒が良気相な有名観光スポットを巡ることにしていた。そして夕刻近くに來た凱旋門。他の生徒の姿もまばらにだけ見える。

「ふあ・・・おつきい。」

「くくつ、朝貴が前に立つとさらにでかさが際立つな！」

「青葉先輩——？それどういう意味ですかあ？」

「朝貴はちっちゃくて可愛いつてことだよ。」

「会長まで——！」

「ですが、まあ今年はそれでも表立った問題はそれほど起きてないようですね。いまのところは。」

良介がメモを見ながらつぶやく。この人はどこまで真面目なんだろうか。そんな良介のよこにいた清桜がふーんと顎に手を当てつつ言う。

「まあ、今年は俺らが見張ってるしね。いいよ、昼間問題起こさな

いならね。夜は・・・まあ、テキトーに盛らせとけば？」

「清桜・・・貴方会長としての発言つてもものがないんですか？」

「ない！俺も盛りたいお年頃なんだよ！ね、朝貴！」

「いやです！」

「あは、会長フラれたっすね！」

「朝貴——！」

「いやつたらいやです！！パリジエン又に盛るでもなんでもしてきたらいいじゃないですか！！！」

「パリジエン又より朝貴。」

「んなわけないでしょう——！！！」

このひとはっ！このひとはああああ！！フランスに来てもこのお！？つて・・・あれ・・・ちよつと待ってよ・・・確かこの旅行中の部屋割り・・・。

「榊原先輩！青葉先輩！どっちでもいいんで部屋変わってください

——！！このままじゃ・・・さかられちゃいますう！！！」

「俺は・・・遠慮します。」

「俺もパス！いいじゃん、さかられちまえ！」

「酷い！先輩酷い！」

「酷いのは朝貴だよ。」

くじ引きなんて誰が決めたんだよおおおお！！会長とおんなじ部屋なんてそんなの・・・そんなの・・・そんなの・・・危険な香りがするよおおおお！！！！

「んじゃ、そろそろチェックインしないといけないし、俺らその後風紀の奴らと今日のまとめとかいう話し合いあるでしょ？」

「ですね。じゃ、ホテル行きますか。朝貴、いきますよ・・・？」

「いやです！行きたくない——！！！」

「駄々っ子行くぞー！」

「駄々っ子違いますうー！！」

波乱の修学旅行幕開けです！

*** 8 * (後書き)**

あ、ちなみに先に言うておきますと、あの風紀委員長は出てきませ
ん。

龍弥の出番はまたのちにありますので。

翌朝・・・・・・・・

「無事朝を迎えられたあ！」

「ちょ・・・ひどくない？俺の印象悪くなっちゃうでしょうに。俺
そこまで節操無しかじゃないよ？」

何言ってるんですか。僕にとっては死活問題なことなんですよ！そ
りや会長はあの風紀委員長さんよりましかもしれませんが、寝込
み襲われるとか、そんなのむりiiiiiiiiiii！！

朝食をホテルの近くのカフェテリアで撮る生徒会面々。

「で、今日の予定はどうするんですか？」

「一応、昨日で生徒会全員で見まわるのは良いから、今日は各自別
々でもいいんだけど・・・。」

生徒会や風紀委員会は、個人行動が認められている。四日あるうち
の二日間は集団行動が義務付けられてるが、それ以外の二日間は個
人で行動しても良いのだ。特権というやつだろう。それで、生徒会

は昨日集団で行動していたので今日は個人での行動が許されているのである。一般の生徒も生徒会や風紀の誰か一人でもともにいれば許される。代わりに今日風紀委員は集団行動をするのだ。

「各自でもいいけど、朝貴困っちゃうね？」

「う．．．．．」

そりゃ僕フランスくるの初めてだし、フランス語話せないし、土地勘ないし．．．。うう．．．でも恵一とかはもう出発したってメール来たし．．．どうしょ．．．。

「俺でよければ一緒にいる？」

「会長と．．．？」

「良介と淳はあれでしょ。デートでしょ？」

「まあ．．．約束あるので．．．。」

「俺もつすね。わりいな、朝貴。」

「先輩たち．．．．．う．．．なら仕方ないですね。今日は会長と一緒にいます。」

「やた！朝貴とデートだー！」

「なんでそうなるんですか！」

この人の頭にはそればっかなのかなあ？

というわけで、僕は会長とパリの街を観光することになりました。

「ほんとによかったの、俺とで？友達とかとさ。」

「もう置いてかれちゃいましたもん。朝早く今から行ってくるなってメール来ましたから．．．今ごろどこかいてますね。」

「．．．．．朝貴さ．．．生徒会入りたくないなかった？」

「え・・・・・・・・？」

その言葉に、朝貴は思わず足をとめた。少し前で止まった清桜は少し悩ましげな表情で朝貴の方に振りかえった。

「入学式でいきなり会計に任命して、一年なのにさ。一年ってまだ学校のノウハウ全くわかんないじゃん？朝貴それでも外部入学だったのに。それなのに生徒会になんか入ることになって、友達とか作ってる暇なんかなかったんじゃないかってさ。俺一応責任感じてるんだ。」

「かいちよ・・・・・・・・。ぼく」
「！！」びつくう！？」

突然聞こえた叫び声に朝貴の言葉は遮られた。何かと二人がその方を見た瞬間、朝貴の両手はその叫び声をあげた女性の両手に包みこまれた。その女性はまじまじと近くで朝貴の顔を見た後、フランス語でもものすごい興奮しながら何かを言っていた。だが、フランス語が分からない朝貴の頭には？マークが浮かび上がっていた。それに気がついた清桜はその女性にフランス語で話しかける。清桜は日本語はもちろん、英語・中国語・フランス語・ドイツ語・イタリア語と計6ヶ国語はなせるらしい。今も流ちょうなフランス語で話している。暫く話していた二人だったが、何故か同じ笑みを浮かべて朝貴の方を向いた。

「か・・・・・・・・かいちよ・・・・・・・・？」

「朝貴、がんば！」

「え・・・・・・・・えええ・・・・・・・・え・・・・・・・・ちょ・・・・・・・・どこ連れてく気ですか——！！？」

パリジェンヌに手を引かれ朝貴は半ば強引にどこかへと連れて行か

れた。その後ろから清桜は内心びくびくしながらそれでもついていた。

俺、朝貴に殺されちゃうかもね……。あはは

で

「ぐすつ……。なんでパリに来て、絵のモデルなんかしなきゃいけないんですか……。それも女の子のカッコして……。しかもなんで今もその格好してなきゃいけないんですか……。」

「しょうがないねー。あの女のひと、朝貴のこと女の子だと思ってたし。」

そんなのうれしくないですよ……。

「それに最後まで気づかれなかったし、あそこで男ですってばらすのもねえ……。」

ねえ……。じゃないですよ……。何が楽しくて、水色のワンピースに白い花飾りついた帽子がぶらなきゃなんないんですか……。

「会長知ってたくせに……。ひどいですよ……。」

「ごめんて。だって見たかつ「なんですって？」なんでもないよ……。お詫びに、あそこでジュース買ってきてあげるからさ。何がいい？」

そう言って清桜が指差したのは通りにあるフルーツパーラーだった。

「メロン……。」

「はいはい。そこらへんで待ってて。」

メロンくらい安いですね。会長の家お金持だし。それに一番メロンって高い気がするし、当然の要求だよな。

そう思いながら朝貴は店の前にある噴水がある広場に行った。しかしそこは清桜が向かった店からは死角になっている。そんなことを知らないまま、噴水を眺める朝貴に危険が迫って来ていた。

*** 9 * (後書き)**

パリにフルーツパーラーってあるんじゃないか・・・
メロンのジュースはおいしいです。

そして次回、朝貴に危機が・・・

*** 10 * (前書き)**

今回、ちょっとあれてきなはしがありますが、そんな生々しくな
んか書いていないので、大丈夫だとは思いますが・・・。

苦手な方は、下のほうまでスクロールしちゃってください。

朝貴が異変に気がついたのは、噴水に映る影が増えたからだった。朝貴の影と、それよりもやや大きめの影が二つである。なんだろうと朝貴が振り返ると、フランス人らしき男が二人立っていた。そして朝貴に向かってフランス語で話しかけてきた。

だから・・・僕わかんないんだよ・・・フランス語・・・。会長！
カムバ——ック——！！

しかし、そこからは清桜の姿は見えない。声をあげても、噴水の音にかき消されるだろう。どうしようかと悩んでいた朝貴の腕を、二人組の片方がギュッと握ってきた。

「え・・・ちょ・・・うわっ・・・！！？」

いきなりそのままの状態で歩きだした男。朝貴も自然に歩かざるを得なくなる。

え・・・え・・・もしかしてこれって・・・ゆゆゆ誘拐！？どどどどどうしょ・・・異国の地で誘拐とか・・・無事に帰れるわけないよね・・・。

「ちょ・・・やだやだ・・・離して・・・やだあ！！」

だが、はいているサンダルヒールのせいであまり足に力が入らず、抵抗してもそのまま引きずられるようにどこかに連れていかれている。

「やだっ・・・誰か・・・誰か・・・助けて・・・誰かあ!!!」

なりふり構わず大声を上げる朝貴。ちよつと路地に入ったところで思いつき壁に押し付けられるまでは叫んでいた。壁に押し付けられ、頭がくらくらする中、朝貴は見た。男たちの目を。その瞬間、ぞくりと背筋に寒気が走る。

まって・・・ちよつと待つて・・・ももも・・・もしかしてこの状況・・・やばい？別の意味でやばい？あれだよ・・・これっであれだよ・・・食べられちゃう数秒前的な状況じゃない!?だってこの人たちあの時の風貴委員長と同じ目してるもん!!ぎゃああああああここ学校じゃないのに——!!絶賛貞操の危機とか・・・やだああああ!!

そして朝貴の想像は悲しくも的中してしまうのだ。しだいに伸びてきた男たちの手は、朝貴の体のラインを滑るように上から下へと動く。その感覚の気持ち悪さに、思わずびくんと体がはねた。それを見て男たちが笑みを浮かべるのを見て朝貴は泣きたくなってくる。この人たちは、朝貴がいくら女装してるからといって女だと思つてこんなことをしてるのではないと分かった。いくら朝貴が華奢でも、男の子の体付きなところはいくらでもある。胸だつてないに等しい・・・というかないし、あれだつてちゃんとあるのだ。声だつて低くもないが高くもない・・・つまり、男たちは完全に朝貴を男だと知った上でこんなことをしているのだ。それに気付いたとたん、さらに気色悪さが強調された。

やだ・・・やだ・・・なんで・・・なんで・・・修学旅行だよ・・・初めてのフランスなのに・・・なんで・・・なんでこんなことになつて・・・いやだ・・・こんな・・・わけわかんない

人たちに・・・触られるの・・・気持ち悪いよ・・・怖い・・・やだ・・・やだ・・・やだよ・・・。

「だ・・・れか・・・たすけ・・・。。。。。。かいちよ・・・。」

自然と浮かんだ一人の存在。でも、なぜかきつと助けしてくれると思えた。そしてつぶやいた。会長・・・と。

ばしゃっ

触れられる感触から逸れようと、目をつぶり涙を浮かべていた朝貴の顔の前でそんな音がした。涙があふれた音ではない。服が引き裂かれた音でもない。じゃ・・・この音は何だろう。そう思い、朝貴は恐る恐る目を開けた。するとそこには驚きの光景があつた。今まで朝貴のすぐそばにいて触つて来ていたはずの男たちはなぜか顔をこすりながら少し離れたところにいた。顔がぬれている。濡らした何かが目に入つたのか、目を開けられないでいるようだった。そして朝貴の目の前に、見慣れたあの薄紫の頭・・・。

「か・・・いちよ・・・。。。。。」

助けに・・・来てくれた・・・？ほんとに・・・？

清桜は空になった二つのコップを地面に落とし、いまだに顔を拭っている外人二人をにらみつけていた。

*** 10 * (後書き)**

食べ物粗末にしちゃいけませんw

ジュースとかって、目に入るとしみるものなんでしょうか・・・
私はそんな経験ないんでわからないのですが・・・

いまさらですけど、薄紫の頭って・・・どこかのおばちゃんみたい
だなw

いえ、清桜のはかっこいい頭です。それなりのヘアスタイルで
す。多分w

*** 1 1 * (前書き)**

話はちょっと戻って・・・(といっても数分ですが)

清桜視点です。

ジューズを買って、そのあたりにいるはずの朝貴を探した。でもなぜか見つからない。近くの噴水広場や、朝貴の興味を引きそうな店なんかものぞいてみたが、どこにもいない。しだいに膨れ上がる不安。

「朝貴・・・どこ？」

嫌な予感がして仕方がない。とりあえず、さらに遠くまで朝貴を探しに行くことにした。フランス語を知らない朝貴が店に勝手に入って買い物をするとは考えにくい。土地勘もないのだから、独りでそんなに遠くまでふらふらすることもできないはずだ。でも近くにはいなかった。つまり、誰かとともに遠くまで連れられている。ということになるのではないか・・・それが純粹無垢な子供だったり、親切な老人とかだったらいいのだが・・・下心ある男とかだったら・・・。

「今の朝貴・・・女にしか見えないし・・・。フランスには・・・あつちの人も多いから・・・。」

こんなことになるなら、一緒に買いに行けばよかった。一人になんかせせないで・・・なんで一緒に行かなかったんだ。

清桜は人通りがほぼない路地のほうに来ていた。そしてかすかに朝貴の声が聞こえたような気がした。

「近くにいるのか・・・。」

『・・・け・・・かいちよ。』

今度は少しはつきりと聞こえた。間違いない。日本人の声。しかも会長ときたらもう、一人しか思い当たらない。路地の角をまがった。そこで清桜はようやく朝貴を見つけた。だが、安堵した瞬間もつかの間。朝貴の状況に、怒りを覚えた。そして、考える間もなく清桜は動いた。

男たちの顔めがけて買ったばかりのフルーツジュースをぶっかけたのだ。よろけながら朝貴から離れた男たち。清桜はすぐに朝貴の前に立ち、自分の後ろに朝貴を隠す。

「かいちよ・・・。」

やや涙声で、そうつぶやく声が、どこか弱弱しくて。それがさらに怒りを増幅させる。許せない。目の前の変態どもが・・・。そしてこんな目にあわせてしまった自分自身が。後ろでずるつという滑るような音が聞こえた。ああ、腰でも抜けたのかなと思う。座っていいから。あとは俺がやるから。

いまだに顔を拭っている変態フランス人に近寄っていく。

（以下フランス語）

「んで？君ら何してくれたのかなあ？あの子にあんなことしていいって誰が言ったのかなあ？」

「んだよおまえは！！」

「いきなり顔にぶっかけやがって！！」

「そんなことされるようなことしてたあんたらが悪いんじゃないの

？で、それなりの覚悟があつてあんなことしたつて思つていいんだよね？」

「おい、行こうぜ。」

「ちつ。」

あれ。なんだ・・・逃げちゃうんだ。ま、いつけどね。いや・・・よくないけどね。せめて一発殴らせてよ・・・なんて、口が裂けても言えないけど。あの子に害をなした奴になら、どんなことだつてするよ？なんてね。久々にマジギレしちゃった。

逃げて行つた男たちの姿が見えなくなつた曲がり角を見つめていながら、そう思つていた清桜のズボンのすそをきゅっと握つた感覚がした。ふとその方向に目を向けると、朝貴がうつむきながら、ズボンを握つていた。

「朝貴・・・。」

しかしその手はすぐに離れて、ぎゅっとワンピースのすそを握る。ぽたりぽたりと、ワンピースに涙の跡ができる。清桜はしゃがみこみ、そしてギュッと強く朝貴を抱きしめた。

* 1 1 * (後書き)

いまさらですが・・・

私って女装させるの好きなんですかね？

ほかの作品でもあったので・・・今回の朝貴もワンピース着てますし

だってかわいいんだからしなきゃ損でしょ！！！
↑

うん。今度からもそういうの多分あると思うので、お付き合いしてくださいね！なんてw

で、やっぱり清桜は助けに来ますよそりゃ。

清桜だもんw

つか、朝貴の声聞こえたとかどんだけ地獄耳なんだあいつ！！

*** 1 2 ***
(前書き)

あれ、前回ちょっと清桜の素っぽいところが出ちゃった？

そんなことないですよー気のせい気のせい。

でも好きな子のためなら何でもやっちゃうとか結構いいかもw

ぎゅっと、痛いくらいに抱きしめられた。会長の肩のところにおでこのつかつて、会長の服に涙がしみ込んでいるのがわかった。だからほんとは離してほしかったけど、なんとなく安心できるそのあつたかさに甘えて離れられなかった。ワンピースを握っていた手はいつの間にか会長の服を握ってて、しがみついていた。

「ごめんね、朝貴。こんな目にあわせて。俺のせいだ。」

「ちが・・・僕がふらふらして・・・あの人たち・・・振り払えなくて・・・だから・・・。」

「そんなことないよ。二人がかりだったんだしさ。」

「かいちょ・・・う・・・うえっ・・・。」

嗚咽をあげて泣き始めた朝貴の頭を、ポンポンとなだめるようになでていく。

朝貴が落ち着いたのはそれからどれほどたったころだったか。

「ちょっとはすつきりした？」

「は・・・い。あの・・・助けてくれて・・・ありがとうございまして・・・。」

「このくらい当然だよ。だって朝貴は俺の・・・むぎゅっ・・・。」

「そんなこと言う口はこの口ですかあ？」

「あひゃき・・・ひひいほ・・・（朝貴、ひどいよ）。」

「っていうか・・・僕のジュース・・・。」

「あ・・・ごめん。・・・とっさにというか・・・。」

「メロン……。」

「ごめんで!! すぐ買ってくるから。」

「いいです……もう。その代わり、明日なんかおごってください。」

「いいよ……。じゃ、帰ろうか。そろそろ夕飯の時間だしね。今日はホテルでバイキングだよ。」

「はい!」

元気に返事した朝貴だったが、なぜか立ち上がる様子がない。

「朝貴?」

「会……。長……。た……。立てません……。足……。うごかな……。くて……。」

僕そんなに必死に抵抗してたのかな……。足動かなくなる程なんて……。よつぽどだったんだ……。ど……。どうしょ……。これじゃ帰れない……。

「仕方がないなあ。はい、どーぞ。」

「え……。会長……。まさかそれって……。」

背中を向けてしゃがみこんだ清桜。間違いなくおんぶする時の格好。

「おんぶしてくからさ。ほら、早く早く。何ならお姫様だっこでもいいよ?」

「お……。おんぶでいいです!!」

お姫様だっこで街中歩いて帰るほうが恥ずかしいよ!! おんぶも恥ずかしいけどさ……。お姫様だっこよりはまし!!

何とか清桜の背中に乗った朝貴。清桜の背中に揺られながら、ホテルへと帰る。その帰り道、朝貴はふと懐かしさを覚えた。

そつえば・・・昔誰かにこうやっておんぶしてもらったな・・・。
。誰だっけ・・・お父さん？もうちよつと・・・小さい背中だった
気がするけど・・・だめだ・・・思い出せない・・・。

ゆらゆらゆれるのが心地よかったのか、朝貴はいつの間にか夢の中へとはいって行った。

* 1 2 * (後書き)

いつそお姫様だったってのもありですね。何の羞恥プレイだw

なんだかんだいって朝貴は清桜のことそんなにやじゃないんですね
え・・・

ホテル一階のレストラン。そこに黎明学園の生徒がひしめき合っていた。その場所の一角にあるテーブルに副会長の良介と書記の淳がすでに帰って来ていて、清桜と朝貴の帰りを待っていた。良介はアイスコヒーを飲みながらフランスの新聞を読み、淳は早くも夕飯のバイキング一皿目につけていたのだ。そこにとんでもないかわさが流れてきた。

「俺見ちゃった！会長が女の子部屋に連れ込んだの！！」

「ぶーーーーー！！！」
「ごほっごほっ……。」

思わず二人は噴き出した。あの会長が女を連れ込んだ！？

「んなわけあるんすか!？」
「ありえませんが……しかし……とうとう清桜も……。」
「ていうか、朝貴は!？」
「……部屋に行ってみますか……。」

二人は急いで清桜と朝貴の部屋へと向かった。エレベーターに乗り、部屋がある階のボタンを押して、ついには降りて部屋へと走る。そして部屋の前に就いた。

「ていうか……入るんすか？もしその……あーんな状況になつてたら……俺いたたまれないっつーか……。」
「ですがそれにしても静かですし……。清桜!」

良介は戸惑いつつも部屋をノックした。すると中から清桜の返事が

聞こえてきて、すんなりとドアが開いた。

「あれ、良介に淳じゃん。どうかした？」

「どうかしたじゃないですよ。清桜、あなたとうとう・・・男から女に？」

「見損なつたつすよ？てつきりこのまま朝貴一筋で、いつか朝貴が惚れるほうに俺賭けてたんすよ！？」

「は？え？ちよ・・・なんの話よそれ。俺今でも朝貴一筋だけど？」

「今、下でうわさが流れてたんですよ。」

「噂？」

「会長が女の子部屋に連れ込んでたつてやつつす。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ。ぷっふふふふ、女の子ねえ。ぶっ・・・・・・・・ははははは！！やつばそう見えちゃうよねえ。かわいもんねえ。ぷつくくく、やば、おつかしい・・・・。二人とも入ってきなよ、今からその女の子にあわせてあげるからさ。ま、今寝ちやつてるけど。」

そういつて、清桜は二人を部屋に招き入れた。二人が中に入つて、二つあるうちの一つのベッドの上ですやすや寝ている人物を覗き込む。黒くて長い髪の毛。薄く施された化粧。どこからどう見ても女の子だ。

「つて、やつば女の子じゃないつすか。」

「だっから違うつての。大体、そんなことばっか言つてると怒られるよ？この子にさ。うーん・・・・うまく取れるかな・・・・。」

「取る？」

清桜はそういうとスッと女の子の頭に触れて、髪の毛を思いつきり引っ張つた。

「いつ……。」

「ちょ……清桜!?!?……え……?」

清桜の手に握られた、女の子の髪の毛すべて。だが、その女の子の頭にはまだ黒い髪が残っている。まん丸のところどころはねたショートヘアー……。

「あ……朝貴!?!」

「女装……ですか……?」

「ちよつと、わけありでねー。だから言っただじゃん。俺はこの子一筋だつて。勝手に勘違いされちゃ困るよー。」

ふりふりと黒いロングヘアーのかつらをふつて、良介たちの方向に振り向きながら言った。

「いや……だつて、これじゃあぱつと見わかんねーつすよ?」

「女顔だと思つてましたけど……ここまでとは……。」

「でしょでしょ。俺が一番びつくりした。最初見たときは朝貴だなんて思えなかったもん。化粧もそんな濃くないから、元が可愛いってことぶうつ!?!」

「だーれが、かわいいですかああ!?!」

「あ……朝貴……起きたの?」

清桜の頭に、枕がクリーンヒットした。その枕を抱えて後ろを振り向くと、起きたのか朝貴が眉を吊り上げて不機嫌極まりない顔でこっちを見ていた。

「今起きました。たつたいま!人が寝てるからつて……かわいいかわいしばつか……僕男です!かわいくなんかないんです!?!つて……え……榊原先輩?……青葉先輩?……え……」

え……ぎゃああああああ見ないでください！！帰ってください！！忘れてください——！！」

「今さらですか？」

「見ちまったもんはしょうがねーだろ！記念に写メつとくか？」

「いやああああああああああああ！！末代までの恥しい！もうやだあああああ！！」

朝貴の絶叫は10分ほど続き、神業ともいえるほどの動きを見せて、あつという間に着替えたのだった。やけ食いなのか、朝貴がいつもの数倍食べたのは言うまでもない。ただでさえその体に合わないほど異常な量を食べるのにもかかわらずである。

*** 1 3 * (後書き)**

波乱の修学旅行はやっと半分が終わったのです・・・

長いですね・・・。

あ、ばかりで読みにくかったらすみません。

*** 14 * (前書き)**

修学旅行編長いですね。それでもあと二日なのでばちばち終わりが見えてきましたね。

この次はどんな行事にしようか・・・と考えを巡らせます。

早くも夏休み・・・にしてもいいんですが・・・それだともう一個の連載とごちゃ混ぜになりそうです・・・

とりあえず、修学旅行編を進めますw

修学旅行三日目。この日は生徒会四人組での行動する日。

「いやあ、俺らなんか損してるっすね。」

「え・・・なんですか？」

「そりゃ朝貴はいいさ。会長といつでも一緒だからな。」

「な・・・何がですか!!」

「つまり、淳は風紀が個人行動できる日が二日あるのに対し、俺らは一日しかないのが損だと言ってるんですね？明日もありますけど、明日は午前中だけであとは空港で帰るだけですから。」

「そうっす!」

「そか・・・先輩たち付き合ってる人いるんですもんね・・・。」

あったことないけど。うちの学園にいるって言うから男だよな。うん・・・気になるけど・・・っていうか。

「べ・・・別に会長と一緒にだからってなんでぼくがいいってなるんですかっ!!」

「素直になれよ?顔よし、スタイルよし、頭脳よしの会長だぞ?」

「そんなの関係ないです!!僕男ですから!」

「朝貴、この学園にいる以上、その言葉は意味を持ちません。」

「榊原先輩・・・。」

「そうそう。朝貴だってこんな風に迫られたらうんうんって頷くようになるぜ?」

そう言って淳は朝貴の腰に手を回すとそのまま自分のほうへ寄せた。そしてあごの下に手を入れて朝貴の顔を上げさせる。

「ちよつ．．．．。」

「淳．．．そんなことしたら清桜が黙ってませんよ．．．ほら．．．
つて．．．あれ．．．。」

「会長？」

「いつもだつたらここで『朝貴に触るな！』とか言ってくるはずな
んすけど．．．。」

三人の期待？の人物の清桜は、やや後方で立ち止まって自分の額に
手を当ててうつむいていた。そして、少し遅れて反応を示した。

「ん．．．ごめん．．．なんか言ってた．．．？」

「か．．．かいちょ．．．？」

「なんか．．．くらくらすんだよね．．．．．俺先にホテル帰
つてていい？」

「無理しないほうがいいですしね。どうぞ。あとは俺に任せてくだ
さい。」

「あんがと。じゃーね。あ、朝貴部屋のカギ、はい。俺．．．スぺ
アキーもらつてはいるから．．．。」

朝貴に鍵を投げ飛ばした清桜は、そのままホテルへと帰って行った。

「ありや、マジで風邪っぽいっすね。」

「ああ見えてまじめですからね。今回の旅行のために、会長である
清桜は俺以上に走り回ってましたし．．．。」

し．．．知らなかった。僕はただパソコンに向き合っていたりするだ
けだったのに．．．。もしかして、ずっと遅くまで仕事してたのか
な。徹夜とかあったのかな．．．。もしかして、昨日無理したのか
な．．．。

「はっはーん？朝貴やつば会長のこと心配なんだろう？」

「そ．．．そりや．．．あんな会長初めて見ました．．．。」

「まあ、あんなに体調崩してるのは俺も久々に見ましたね。」

なんだかんだいって．．．仕事さぼったりしないもんね．．．。

「あ．．．あの．．．僕も帰っていいですか？会長．．．その．．．心配だし．．．。一人じゃ危なつかしいというか．．．。」

「そういつと思いましたよ。構いませんよ。あとは俺と淳に任せてください。」

「たーっぷり会長のお世話してやんな。」

「うー．．．なんでそんなにやにやしてるんですかあ！ーじゃ、そういうことで！ー！」

朝貴はすぐに会長を追いかけた。追いかけたといっても、走ればまた足が動かなくなるので、やや早歩きである。それでも、熱のせいなのかふらふらの清桜にはすぐに追いつき、自分も一緒に帰ると言って、それじゃ朝貴が．．．とかぶつぶつ言っている清桜を強引に引っ張って帰った。部屋に帰ると、清桜はすぐベットで寝てしまったのだった。

* 14 * (後書き)

淳の行動に下心などはありません(ここ大事)。

一応いますので恋人君がw
朝貴とじゃれるのはただのおふざけ。

にしても、最近朝貴って鈍感なのかねって思います。いい加減ドキドキしてもいいはずなのに。いい加減清桜に惚れてもいいはずなのに。。。。

ともあれ、次回もよろしく願いします。

*** 1 5 * (前書き)**

書いてて恥ずかしくなったのはひざびさ。

でもこんなで恥ずかしがっちゃだめですよねw

でもこういうの好きなんです。

どういふのかは←をw

静かに、ただ寝息だけが聞こえている。だがその寝息は、一定なものではなく、どこか苦しそうに荒れていた。ホテルに帰って来てから数時間、朝貴はひたすらそんな寝息を立てて寝ている清桜の額を、水にぬらしたタオルで拭っていた。

「こんなときどうすればいいかなんて・・・わかんないよ・・・」

「

看病してもらうことはあっても、看病するなんてことそれこそ一度もなかった。今までしてもらっていたことを思い出しながら、朝貴は汗をぬぐっていた。一緒に来ていた保険医は今違う生徒を見てるらしくすぐにはこれそうにない。清桜が熱を出したのが、ただの過労から来たものならいいのだが・・・とそんな風に不安になる。湿らせて冷たくなっているはずのタオルがすぐに熱く熱を持つ。体温計がないから何度出ているのかもわからない。とりあえず朝貴は、洗面器の中にためた水を変えるためにいったん洗面所に向かった。新しい冷たい水を入れる。その水でタオルを湿らす。ただその繰り返し。ただそんなことしかできない。薬だつて、一人じゃ買いにも行けないし・・・ほんとに何もできないんだと思う。洗面器を持ち、再び清桜の傍らに戻る。

いつも、しっかりしたところ（まあ、多少ふざけたところもあるが・・・）しか見たことがなかった分、こんな清桜の姿を見るとさらに不安が膨れ上がる。大丈夫なのか、心配で心配でたまらない。しっかりと水を絞り、清桜の額に浮かぶ汗をふきとろうとしてのばした右手を、突然清桜の手がつかんだ。

「っえ・・・・・・・・!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・。」

起きたのかと思い、一瞬手のほうに視線を移していた朝貴は再び顔を見た。だが、まだ清桜は寝ている。無意識でつかんだのだろうか。

「か・・・・・・・・いちよ・・・・・・・・?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・き・・・・・・・・。」

何かをつぶやいているようだが、朝貴には聞き取れない。首をかしてどうしようかと思っていた朝貴の体が突然、前のめりになって倒れていく。

「っえ・・・・・・・・っ・・・・・・・・ん・・・・・・・・!？」

え．．．．．なに．．．．．なんで．．．．．こんなことに
なってるの．．．？

柔らかい感触

それは唇にだった

見開いた朝貴の瞳には

間近にある清桜の顔

朝貴の頭には清桜の手が添えられていて前のめりになったのは掴まれた右手が一気に引き寄せられたから。そして、突然の事にとどまりが聞かなかった朝貴は、その力により——清桜とキスしていた。それは一瞬にも近かった。すぐに清桜の手から力が亡くなった。ふらりふらりと解放された朝貴は後ろに下がり、へたりと床に敷かれた絨毯の上にしゃがみこんだ。口元に手を当てて、顔は火が出そうなほど真っ赤になっていた。大きく見開かれた瞳は揺らぎ、今起こった出来事が理解できずにいることを示しているようだった。そして、はっとした朝貴はそのまま、隣の空いているベットにもぐりこみ、頭から布団をかぶってこもった。

*** 15 * (後書き)**

あいて寝てて、それでチューされちゃってって感じの好きです。
いえなんとなくですけど、それであれこれ考えちゃうのも好きです。
今回の朝貴みたいに放心しかけてるのもかわいいとおもう。ぽけっ
としてるのがw

明かりを点けていない室内は暗い闇に覆われて来ていた。それが時間の経過を伝えている。だが朝貴は気がつかない。あれからずっと、布団を頭まで被せ暗闇に包まれていたからだ。胸の高まりは静まることを忘れたかのように力強く、大きく動いている。俯せになって、枕に顔を沈ませていた。いつまでも繰り返し思い出される出来事に、彼の気持ちは静まらない。いつもだったらあそこで何するんだと言つて、押し返したり、文句言ったり、悪ければ平手打ちくらいはしていただろう。だが、今はそれはできない。沸き上がってきているのが、怒りなのか、悔しさなのか、何なのかはわからない。それをどこかにぶつけることもできない。

そう思いながら、朝貴の意識は次第に薄れ時計の針が9時を指す頃には寝息を立てていた。そこで部屋のドアがノックされる。2回くらい繰り返されたところで、ようやく朝貴の目が覚めた。始めはとも出る気分にはならなかったのだが、無視するわけにもいかず、朝貴はベッドから抜け出し、ドアを開けた。そこに立っていたのは良介だった。

「榊原先輩？」

「その様子だと朝貴も寝てましたね？起こしてしまいましたか。」

「いえ・・・いつの間にか寝ちゃってたみたいで、いいんですけど・・・。」

「そうですか。にしては・・・少し顔赤くないですか？」

「!？」

す・・・鋭いなあ・・・。

「な・・・なんでもないですよ！布団頭まで被ってたからそれで
すよー！」

「よく息苦しくなかったですね。そうそう、これ風邪薬です。清桜
が起きたらでいいので飲ませてください。」

「ありがとうございます。」

「じゃあ俺は今日の集まり出てきます。朝貴は今日の集まりは出な
くていいですから、清桜の看病しててください。」

「

「わかりました。」

良介が立ち去り、ドアを閉めて部屋に戻った朝貴はベッドの傍のラ
ンプの台の上に薬を置き、自分のベッドにあがった。そして、その
まま横たわる。ばふんと、羽毛いっぱいの枕にあたまを乗せる。

「だって・・・だってさ・・・会長が好きなのは・・・朝貴なんだ
もんね・・・。だから・・・さっきのも・・・全部・・・朝貴にし
たことだから・・・だから、僕は関係ないんだよ・・・。」

いつも僕はそうだもん。

僕は僕であって僕じゃない。

むしろ僕なんて存在はないに等しいんだ。

今ここにいる意味だってないに等しい。

そう、これはすべてあの人の思惑。

僕はそれに従うだけ。

いつからだろう。

僕が僕を見いだせないのは。

だって朝日は・・・・・・・・・・・・・・・・昇ってくんだよ？

* 16 * (後書き)

朝貴は病んでるんですかね？

あれ・・・そんなつもりじゃないんですが、どうしてもそうなる人物設定なんですよ・・・orz

徐々にシリアスも入ってくるし・・・
何とか頑張ります。

*** 17 * (前書き)**

これにて修学旅行編はラストになります。

次は・・・どうしましょうw

ふと、目が覚める。どうやら考え事をしているうちにまた寝てしまったらしい。始めは布団から出たくなって再び寝ようとしていた朝貴だったが、微かに聞こえる水の音に気づいて体を起こした。そこで水の音は途絶えた。ふと、隣のベッドにいたはずの清桜の姿がないことに気づいた。そして浴室に続くドアが開いて清桜が現れた。どうやらシャワーを浴びていたようで髪の毛から雫が滴っている。

「あー、朝貴おはよ。」

「おは・・・ようございます・・・って、その恰好なんなんですか！？」

なんで腰にタオルまいただけで出てくるのこの人は！！

「服とか全部こっちに置いたままシャワー浴びたもんでさあ・・・あはは。俺朝ダメなんだよねー。」

「そーみたいです。ですけど朝からやめて下さい。」

「朝貴つめたいー。俺病み上がりなのに。」

「そーいえば、もういいんですか？熱とか・・・。」

「うん、すっかり治っちゃった。でも朝貴が看病してくれるならもう少し風邪ひいてたかったな。あ、一緒にシャワー入る？俺まだ目、覚めてないから入る・・・ぶふっ！！」

「入りません！！一人で入れます！！」

あれ・・・でも、普通だ。もっと緊張するとか、挙動不審になるかと思ってたのに。会長と普通に話せてる。まあ、会長あのこと知らないからけど・・・でも・・・良かった。

「ひどーい。病み上がりなのに、枕ぶつけるなんて。」

「おはようございます。目、覚めましたか？」

いまあるこの環境を壊したくなんかない。

それがたとえ、触れるはずがなかった環境でさえ。守りたい。

当たり前の日常でも、僕にとってはそれらすべてが新鮮で

真新しいもの。

狭い檻の中にいた

あの頃にはふれあえなかったもの

それが現在^{いま}。

外って、楽しいんだ。

あの時ふれあえなかった。

でも

今はそれができている。

たとえそれが僕の居るべきところではなくても

せめて

せめていられる間だけでも

僕はこの環境にいたい。

北條 朝貴として、生徒会会計として……

今だけは自由に生きていたい。

朝が来る

その時まで・・・・・・・・・・・・・・・・

「朝貴、荷物まとまった？そろそろ空港行かないとね。」
「は、はい！」

長いようで短かった。いろんな事があった修学旅行は、こうして幕

を閉じた。

*** 18 * (前書き)**

前回で修学旅行編は終わったので、今回から新しいお話に移ります。
少し遅れてしまいましたが、夏休み編です。

修学旅行が予定以上に長くなってしまったせいですね・・・

さて、終業式も終え朝貴たちは夏休みを迎えた。夏休みなどの長期休暇は諸事情がない限り生徒は全員家に帰ることになっていた。もちろん朝貴も例外ではない。だが、朝貴は乗り気ではなかった。家になど正直帰りたくないのだ。だから今朝も何とか寮に残れないかと先生に頼みに行っていたが帰ることになってしまった。生徒もまばらになった学園の正門前。自分の荷物を詰め込んだ鞆を抱えつつ朝貴は迎えに来る車を待つ。じりじりと照りつけてくる灼熱の太陽がうつむく朝貴の首に痛いほど降り注ぐ。するとヒリヒリし始めていた首筋に冷たい何かが降ってきた。それがあまりにも突然だったため朝貴は思わず間抜けな声を上げた。

「うひょあ!？」

「あっはは、何その声。てか大丈夫?こんなところじゃ熱中症になるよ?」

「会長……。」

近々に冷えたペットボトル飲料を振りながらいたずらな笑みを浮かべて立っていたのは、この学園の生徒会長の清桜だ。

「まだいたんですか……。とづくにもう帰ったのかと……。」

「ん、まだ少しやること残ってたからね。やっと終わって今から帰るんだよ。あ、これあげる。水分取った方がいいよ?まだ開けてないから。」

清桜から受け取ったペットボトルは買ったばかりのようで、持っている手から冷気が体中にしみわたる。

「え……。ありがとうございます……。」

「迎え待ってるの？」

「はい……。もうすぐ来ると思っんですけど……。」

「元氣ないねえ。暑いからっていうより、帰りたくない？」

「まあ……。お金あつたらホテルでも泊まりたいです……。」

あんな家に帰るなら公園で野宿のほうがましだもん。あんな家……。いるだけで息苦しくて怖くて泣きたくて。一秒でもいたくないのに、一か月もいなきゃいけないなんて。それこそ地獄だよ。うれしはずの夏休み。でも、家に帰るせいでそれはもはや地獄の夏休みに他ならないよ。

「……………うち来る？」

「え？」

「そんな嫌ならさ。家来ちゃえば？朝貴一人くらい家じゃなんともないしさ。嫌なんでしょ？なら我慢することないじゃん、帰んなきやいいんだよ？せつかくの夏休みなんだし、ね？」

「……………」

それは嬉しい。けど、けどさ……。

「いえ、帰ります。嫌なのはイヤですけど……。でも……。帰らないといけないんで……。ありがとうございます。」

「そう……。なら仕方ないね。なんかあつたりしたら連絡してね。メールでも電話でもなんでもいいからさ。」

「はい。」

「じゃ、またね。」

なぜか少し困ったように笑いながら、清桜は自分の家へと帰って行った。聞いたところによると彼は迎えは断つたらしい。寄りたいところとかあるし、迎えとかそんなことされるのがいやらしい。彼の

姿が見えなくなるまで見送っていた朝貴。その前に一台の車が止まった。黒塗りの高級車・・・ではなく普通の一般的な、白い国産車である。運転席のドアが開き一人の男が降りてくる。

「すみません遅くなつて。」

「か・・・河合さん？なんで・・・？」

「いや・・・なんでって、一応君付きなんですけどね・・・。」

彼の名前は河合章吾^{かわいしやうご}。北條家で世話焼きとして働いている。もっぱら朝貴担当である彼は、小さいころから朝貴の面倒を見てきた一人だ。そういう意味で、朝貴は彼の事を兄のように慕っているし、信頼もしている。

「そ・・・じゃなくて・・・てつきりあの人の取り巻きの誰かなって思つてて・・・河合さん来てくれるなんて思つてなかっただけで・・・。」

「あの人は今仕事ですよ。で、君の迎えを僕らに押し付けてきたんです。あ、荷物は後ろに積みますから、どうぞ先に乗っていてください。」

「ありがと・・・。」

河合に鞆を渡し、朝貴はペットボトルを持って助手席に乗り込んだ。しばらくして荷物を後ろの席の席に乗せた河合が運転席に乗り込んでエンジンをかけた。そして車は静かに朝貴の自宅へと向かった。

「そのご様子ですと、学校はいやではないんですね。なかなかいいつか・・・まったく連絡もないので、僕らは心配してたんですよ？」

「ご・・・ごめんなさい。そういえば・・・入学前以来ですね・・・。」

「ですが、今日お会いして安心しました。」

「うん、通えるなんて思ってたから、学校って楽しいよ。そういうば・・・初めてだな。普通に学校通うの。」

「そうですね。おからだの方もお元気そうです。」

「うん、風邪もそんなにひかないんだ。」

「それは何よりで。」

車はさらに一般道を進み、そして20分ほどで北條家にたどり着いた。現代では珍しい平屋の日本家屋。厳つい門構え、その向こうには庭が広がり、さらに迷路のように渡り廊下で離れと本家がつながっている。朝貴の自室は離れにある。荷物を持った河合の後ろから朝貴は自室へと向かう。手にしっかりとペットボトルを握りしめていたまま。

*** 18 * (後書き)**

そろそろ・・・登場人物紹介を書かねば・・・と思っております。
結構登場人物多いですね。しかもまだ増えます。後4人は出てきます。

近々アップしたいです。

それともう今日はこれ以上アップできそうにないので一話だけです。
また来週です。

*** 19 * (前書き)**

夏休みなのにこんなにテンションあがない子も珍しいですよね。

そしてそれなのか、暗い。話が暗いです・・・たぶん・・・
学校での朝貴が別人のようです・・・

殺風景な和室。そこが朝貴の自室だった。部屋の隅に畳んで積まれた布団、8段の引き出しがある和筆筥。座布団に、ひざ下の高さまでの勉強机代わりになっている机。どれもこれもきれいにしてあるのは、おそらく河合達のおかげだろう。朝貴は懐かしい自分の部屋を見回し、ホッと胸をなでおろすと、布団のわきに持っていたカバンを置き、机の上にペットボトルを置いた。暑さのせいで、ペットボトルの周りには水滴が生じ、机の板にもそれが滴り落ちている。朝貴は座布団に腰を下ろすとそのままと頭を机の上に乗せた。静かすぎる。離れにあるからというわけではなく、ここへは河合たち以外誰も近づかないのだ。だからこそ、ここは静かなのだ。朝貴は帰ってきてしまったせいなのか、茹だる気持ちを押さえ、鞆から夏休みの課題の教科書類を取り出す。この家にいて何もすることがない朝貴は、早速数学に取り掛かることにした。

かりかりとペンがノートの上をつづる音以外、静かなのは相変わらずだった。もうかれこれ何時間数学をやり続けているのだろうか。夏休み一ヶ月間用になのか、目いっぱい数学それ以外の教科も課題を出された。もう日は傾き始めて、室内も暗くなってきた。だが集中しているのか、朝貴は電気をつけずにいまだ課題に取り組んでいた。そこへ、河合が現れる。

「あ、やっぱりいたんですね。明かりつけないと目を悪くしますよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・朝貴君？」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・あ・・・・・・・・河合さん？」

「相変わらずの熱中ぶりです。学校でもそうだとすれば、成績はよろしいようですね。」

「あ、成績表だね。はい、これが今学期のだって。んー・・・もうちよつと英語が・・・。」

「・・・というより、英語以外は満点じゃないですか・・・。」

「あはは・・・英語はね、長文がよくわからないんだ。単語とかは暗記しなきゃなんとなかるけどさ。過去形とか過去分詞形？とかさ、よくわかんないもん。」

「それでも89点なら合格点でしょう？」

「そうかなあ・・・だってさ、朝貴だよ。朝貴なんだよ。」

「・・・あまりそういう風にお考えになられるのはよくないですよ。」

「ん・・・そだね・・・。僕は僕だもんね・・・。えへへ・・・。最近よくこう考えちゃうから駄目だよな。」

そう。ここに来るといつも思う。僕は僕で・・・僕なんだと。はたから聞いたらなにそれ、といわれるだろうけど。僕にとってはこの世において最も重要なこと。僕の存在意義。自分が何者なのか。それを明確に知るってホントに大事だと思う。

「ね・・・河合さん最近あの病院に行つた？」

「ええ、つい先週行きましたよ。」

「その・・・ど・・・だつた？」

「ご自分でご覧になられた方が・・・。」

「わかつてるよ。・・・ほんとですごく会いたい・・・会って、学校の事とかいっぱい話したい。だって、僕の事一番わかってくれるの——だけなんだもんだから・・・会いたい。けど、会いに行くの・・・怖いから・・・。」

「・・・お元気でしたよ。意識が戻らない以外は・・・。」

「

「そか・・・まだおきてないんだ。」

ああ・・・僕は罰あたり。だって、ずっとこのまま目が覚めないで・・・なんて思ってる。だめだね。でも、一度知ってしまった世界。僕が触れることなどないはずだった世界。そんな世界から簡単には身を引けないよ。願うなら、ずっとずっといたい。あの暖かくてにぎやかで、楽しい世界に。

「朝貴君が来てくれることを楽しみにしていますよ?」

「まさか・・・僕のせいで寝てるのに?意識戻らないですつとそのままなのに?僕は恨まれてるよ。」

そう、恨まれるようなことを僕はしてしまった。

あの日から僕は思う。

なぜあの迫りくる銀色の鋭い刃から逃れてしまったんだろうって。

あ
の
と
き
逃
れ
な
か
っ
た
ら

僕
が
病
院
の
ベ
ッ
ト
に
い
た
は
ず
な
ん
だ
よ
ね
・
・
・

い
め
ん
ね

僕・沈まなくて・

*** 19 * (後書き)**

いろいろ伏線をいれてます・・・

が、それをどう物語の中で解き明かしていくかが難しいです・・・

ばしばし物語にできるよう頑張ります・・・

*** 20 * (前書き)**

相変わらず私の書く季節感無視のお話にお付き合いくださりありがとうございます。

まだ終わりは見えませんので、これからもよろしく願います。

明くる朝。朝貴は河合とともに、実家のある部屋の前に立っていた。朝貴の顔はどこか浮かない。青ざめてすらいる。

「帰りたい……」

「どこにですか……？」

「あの人がいない世界にでも……」
「現実と向き合ってください」

向き合いたい。だが身体が、精神しんしんがそれを拒む。あの人の事は恐らく、生理的に無理なのだろう。受け付けること、受け入れること。それらは今後ありはしないだろう。

朝貴は一度だけ深呼吸し、目の前のドアをノックした。朝貴の家は古風な日本家屋だが、あの人がここを支配しはじめてからリフォームされ、内装が和洋折衷となっていた。あの人の書斎は洋風で、この家で一番広い。中から返事が聞こえてきた。だがそれはあの人本人のものではなく、あの人のお抱えの執事だ。朝貴は意を決してその中に入った。

「朝貴です。昨日学校から帰宅しました。昨日はお忙しそうだったため、挨拶が遅れすみません………お母さん……」

するとあの人 - 母親は書類から顔を上げ朝貴を見た。そしてにこりと微笑んだ。

「お帰りなさい。ごめんなさいね、昨日は。あまり元気がないように思えるけど……」

「いえ、気にしないでください。ちょっと暑さでバテ気味なだけですから……。あの、僕お仕事の邪魔になりたくないのもう部屋戻

ります」

「ゆつくり話したいのに……ごめんなさいね」

「気にしないで……ほんとに……」

最後に朝貴はややはにかんで、そのままその部屋を出た。ドアを後ろ手で絞めた途端、朝貴はその場にひざを抱えてしゃがみこんだ。河合がかがんで背中をやさしくたたく。朝貴は声を押し殺して泣いていた。

「ゆ……朝貴君」

「なんでかなあ……。決めたのに……。自分でさ……。決めたんだよ。それなのにさ……。あの人、相変わらずなんだもん。こんなこと……してる意味わかんなくなってきたよ……」

ある意味優しくて子供思いの母親に映る先ほどの母親。だが、朝貴はあの人を好きにはなれない。

「やっぱさ……。あの方は……。僕なんか見てないんだなって……。改めて思った……。笑ってたよ。あの人。僕に笑いかけてた。それだけで十分……。僕を見てない理由になる……。ううん……。僕なんか最初からいないことになってるんだ。あの人の中でじゃ」

「そんなこと……。ないとはいえませんがね」

「ん……」

河合は、いったん否定しようと思ったが、あえて肯定した。朝貴のことを考えてのことでもありそれに肯定することがあながち間違っていないからだった。あの母親はこの子のことを何一つ見ていないのだ。それ以上に存在すら認めてはいない。だからこそ、朝貴の言い分はあっているのだ。

「部屋に戻りましょう？お夕飯用意させますから、朝貴君の好きな言ってください」

「……ハンバーグ……」

「わかりました。さ、いつまでもこんなところにいたくないでしょう？」

「うん……」

ゆっくりと立ち上がった朝貴は、河合に背を押されながら、自室へと戻っていった。

*** 20 * (後書き)**

朝貴に優しく接していた母親と朝貴の関係とは？

徐々に明かされていく朝貴の過去。わかりやすく文にできるよう頑張りたいです。

*** 21 *
(前書き)**

前回の話を読み返しまして……誤字の多さに自分で気がついてあきれました。

すみません。さっき直しました。おそらくもう大丈夫です。前回は
↑

お盆も過ぎたある日。朝貴は自室にこもり、夏休みの宿題に取り掛かっていた。もうすでに3分の2が終わっているのだ。ほかに何もすることがないと言えばそうなのだから仕方がないのだが……。ふと、古典の現代語訳をしている手が止まった。なにかあった気がするのだ。だがその何かがわからない。

「なにかあったんだよね……この時期……」

ほんの些細なことなのだろうが、いったん気になってしまったためか宿題に再び取り掛かる気が失せてしまった。気晴らしにと、部屋の外へと出る。縁側のようになっているところがちょうど日陰になり、心地よい風も吹いていて、朝貴の憩いの場のひとつであった。そこに足を投げ出して座る。今日はあの人が仕事でいないため、気分気分は良かった。この夏休み中気分がすぐれない日が一体幾日あっただろうかなんて考えたくもなくなるほどであった。そのまま朝貴は体を倒して屋根を見つめる。床から伝わってきたわずかな振動。それは母家のほうから歩いてきていた河合の歩いてくる振動だった。

「ねえ、河合さん」

「なんですか？はい、気分転換にアイス持ってきましたよ？いつものバニラバーですけど」

「わーい。ありがとう」

すぐに飛び起きて座り、河合からバニラバーを受け取った朝貴は、すぐに包みを開いてそれを口に含んだ。少し溶けて柔らかくなり、

ちょうど食べごろな柔らかさだった。

「おいひい……。あのさ、河合さん。この時期ってさ、何かないっけか？」

「この時期ですか？最近ですか……」

しばらく河合はあごに手を当てて考えていたが、何か思い当たったのか顔をあげた。

「そういえば、お祭ありますよ。今週の土曜日に」

「あ！あの神社のお祭り！？」

「ええ。朝貴君、毎年楽しみにしてたじゃないですか。お祭りの夜の食べ物の店完全制覇のためだけに行つてましたし……」

「だ……だけじゃないよ……。そっか、それがあつたね！お祭りお祭り！！あ……でも、行かせてくれるかな、あの人……」

「土曜日は確か関西のほうに会合か何かで土・日といないはずですよ？」

「ほんと！じゃ、抜け出そう」

「お手伝いします」

「うん！」

「では、自分はこれで。あ、あまり宿題ばっかしてると頭パンクしてしまいますよ？」

「大丈夫！」

くすりと微笑した河合はそのまま母家のほうへと戻っていった。再びアイスを食べていると、部屋の中から音楽が聞こえてきた。朝貴の携帯のメールの着信音だ。

「あれ……メール来た？」

アイスを加えたまま朝貴は部屋の中に戻り、携帯を開く。送り主は清桜だった。

「会長？」

08/21 15:32

from:会長

title:久しぶり

やほおゝなんてね。

ねえねえ、今度の土曜日暇？

みんなでさ神社のお祭り行かない？

ほら、朝貴の家の近所の神社。

土曜日お祭あるじゃん？

つて、淳が言ってた。

あ、俺も知ってたけどね！

いけたら一緒に行こうよ！

じゃ、ばいばいノシ

「会長……なんかテンション高いんだけど……。でも、行くならみんなで行ったほうが楽しいよね。うん、行きますつと……送信！あー、アイスおいしかった。さ、もうひと踏ん張りがんばろ！」

僕は知らなかった。このお祭りで、僕があんな目にあうなんて……

…

* 21 * (後書き)

やばい！もうすぐ10月になろうとしてるのに、まだ8月の話書いてますね！！

違和感ありまくりです！ほんとにごめんなさい。このお祭りのお話終わったら、次は一気に文化祭です。運動会？そんなの無視します↑
思うんですが、走ると朝貴は動けなくなる↓運動会とかどうなるんだ？↓無理だ！

って自分で決定づけました。なので文化祭だけです。
ちなみに体育の授業は出来る範囲で参加してます。体育教師もそれは承知の上でなので、ある程度課題をクリアできたら点数をもらうことができます。

というか、メールの清桜のテンションが異常w

朝から鼻歌が止まらない。それもそのはず、今日は待ちに待ったお祭りの日だ。お祭りは夜の6時からなのだが、なぜか2時間前にある場所に来てほしいとメールが来ていた。だから今、朝貴はその指定の場所に向かっていた。携帯とにらめっこしながら、ようやく着いたその場所には、一軒の豪邸があった。どうやらお金持ちの家らしい。現代風の造りだが、嚴重そうなセキュリティのある門、三階建ての大きな家。思わず朝貴は口をポカンと開けて見上げていた。

「こ……こんなところで……何するのかなあ……というか、ほんとにここ？」

間違いではないかという思いがわきあがるが、どう見ても住所はここなのである。朝貴はためらいつつもインターホンをおした。すると中性的な声が聞こえてきた。女の人のようであり、男の声にも聞こえる。

『ふふふ、朝貴君……だっけ？待ってたよ。今開けるから中入ってきて』

「え……あ……はい」

すると、自動的に門が開き朝貴はそこから中へと入った。数段の階段を上り、玄関へと着く。ドアノブに手をかけて開けると、ドアはすんなりと開いた。どうやら事前に開けていたらしい。玄関もこれまた広く、壁には西洋風の絵画、置かれた靴箱の上には高そうな置物や大きな花瓶が置かれていて、玄関に花のかんばしい香りが広

がつていた。

「いらっしやい。そして……はじめましてだよね？」

家の奥から現れたその青年は朝貴より少し年上のようにだった。きれいな前わけの黒いショートヘア、ややたれ気味の黒い瞳。やさしくほほ笑んでいるその青年は玄関であたりに見とれていた朝貴の方へとやってきた。

「は……はじめまして、北條朝貴です……あの……」

「そか、僕は君の事知ってるけど、君は僕の事聞いてないんだっけ淳から」

「青葉先輩？」

「ま、とりあえず上がつてよ。こんなところで立ち話するのもあれだしね。紅茶とお菓子あるからリビング行こうか」

「は……はい」

青年の後に続き朝貴はリビングへと向かった。落ち着いた感じのインテリアで統一されたそこは時間の流れさえゆっくりになったような感じがしていた。そして青年の言うとおり、そこにあるソファセットに紅茶と焼き菓子が用意されていた。青年はソファに腰かけると朝貴にも座るように促した。ふんわりとしたソファに、朝貴は戸惑いつつも座った。琥珀いろのきれいな紅茶がティーカップに注がれる。ミルクを注ぎ入れさらにそこにシロップを入れる。出来上がったミルクティーを朝貴のほうに差し出し、自分用にストレートティーを入れる。

「見かけどおりの甘党なんだって？ ケーキとジュース一緒に食べちゃうような」

「そ……それも青葉先輩情報ですか？」

「うっん、こっちは清桜。甘さ足りなかったら言ってね、シロップいっぱいあるから」

「いただきます。……お……おいしい。この紅茶すごく美味しいですー!」

「そうよかった。淹れたかいがあったよ」

「え……これ……」

「うん、僕が入れたの。このお菓子も僕のお手製。よかったら食べてね」

な……なんなんだろう。このすごい何でも出来ちゃう人は……。

「あの……あなたは……」

「あ、まだ名乗ってもなかったっけね。僕は三王静香みおうしずか一応三年生ね。よく一年だろって言われるけどさ。失礼だよねえ、背も低くないのに。で、淳とは付き合ってます」

「………はい？」

「んふふふ」

あれ……今なんか変な言葉きたぞ。淳とは付き合ってる？ 淳〃青葉先輩。付き合ってる〃恋人……。

「あの……三王先輩……」

「静香でいいよ？」

「……静香先輩……。静香先輩が……。青葉先輩と付き合ってるなんて僕の幻聴……」

「マジだよ」

マジですか! いやあああああ! 何この予期せぬ対面! ー! そりゃ少し興味あったけどさ! あの青葉先輩の彼氏(あれ……彼女さん? 彼氏さん?)……恋人ってどんなかなって思ってたけどさ……。

うん、きれいな人だね。ちぎゃああああああ！！

「くすくす、大丈夫？」

「頭パンクしそうです……」

「純粹無垢って感じ？かわいい」

「かわいくなんかないですう！」

「で、話を元に戻すよ。今日家に来てもらったのはね、ちょっと着てほしいものがあつたからなんだよね」

「着て……ほしいもの？」

「そう、こつちこつち！」

そういつて、奥の方へと移動し朝貴を手招く静香。朝貴がそのほうへと行くとそこには小さな和室があつた。そしてそこにきれいに並べていたものは、朝貴にとんでもない衝撃を与えた。

* 2 2 * (後書き)

というわけで、淳の恋人ようやく登場。

名前だけは前に少しだけ出てましたが、こうして実際に本人がでてくるのはこれが初めてです。出来るお兄さん系をイメージしてますが、どうなんでしょう。

料理も裁縫も勉強もできるんです。

ちなみに彼氏でしょうか彼女でしょうか？

実はどっちにするか迷ってます。

でも多分、彼女さんのほうでしょう。彼女って言うていいのかどうなのか……

三王家の和室は、狭いながらもちゃんとしたもので、きれいな生け花や掛け軸なんかもあった。が、朝貴の目をくぎつけにしているものはそんなものたちではなかった。畳の上にきれいに畳まれて置かれたそれは……。

「ししししし……静香先輩!!?」

「何?」

「ここ……これって……浴衣ですよ?」

「そうだね」

「しかも……全部女性ものじゃないですか!?」

「そうだね」

「え……さっき、着てほしいものって言ってませんでした?」

「そう、だからこれ」

「僕男ですよ?」

「大丈夫。僕が可愛く着つけてあげるから」

「それ全然大丈夫じゃないですうううううううう!! ていうか、誰の提案ですかこれ!!」

「んー、清桜半分、僕半分ってとこかなあ?」

会長……。くう……。絶対に許さないぞう!

「はい、朝貴君あきらめようねー」

この人は悪魔ですかあ!? も……。もうこれは……。腹をくくるしかないってことあ!? うわーん、河合さん助けてー!

「そんなに……いや？」

「女の子のカッコなんて、いやにきまってます……」

「似合うと思うけどなあ……朝貴君のサイズの浴衣この日のために用意してもらったんだけどなあ……。結構これいい奴なんだよねえ？京都から取り寄せたのもあるし……」

やめてー！そんな目で僕を見ないでくださいー！うわーん！

「きよ……今日だけ……ですから……浴衣……」

「ふふ、そう言ってくれると思った。まあ、ピンク地はいやだろうから用意してないよ。んー……こっちの白地に桜の模様か……こっちの黒地に水色の蝶々か……。朝貴君なら、白地のほうがいいね」

「ど……どれでもいいですけど……」

「んー……白地もいっぱいあるからね……」

「……この金魚の……」

「ん？ああ、それがいい？」

「えと……いいとかよくわかんないですけど……」

「じゃ、これにしようか！帯とかは雰囲気で僕が合わせるから。じゃ、そろそろ着付け始めようか。そろそろお祭りまで時間なくなってきたちゃうしね」

そういった静香は、白地に赤い金魚と水を現した水色の水玉が描かれた浴衣を手に、着付けに取り掛かったのだった。着付けなど、あまりよくはわからない朝貴だったが、静香の手なれた感じに思わずびっくりした。

「静香先輩って……なんでもできるんですね。着付けとか……さっきの紅茶とか……」

「男がそんなことできるの可笑しい？」

「そんなことないです。すごいなって……。僕は……何もできない

から……」

「そんなことないんじゃないかな。朝貴君には朝貴君にしかできないこといっぱいあるんじゃない？」

「うーん……」

「ちょっと帯締めるよ。……苦しくない？」

「大丈夫です」

「うん、よし。できた！なんどもあれだけど、やっぱり朝貴君かわいいね。よく似合ってるよ」

そういうと、静香は朝貴を部屋の隅にあつた姿見の前に連れて行った。しっかりと着つけられた朝貴は、かわいらしい少女にも見えなくはなかった。

「お……おかしくないですか？」

「ううん、全然」

「そ……ですか」

「じゃ、リビングで待ってて。僕も着替えちゃうから」

「え……静香先輩も？」

「朝貴君だけじゃあれだし。一応提案者だしね」

リビングに戻った朝貴は、浴衣を汚さないように気をつけつつ、焼き菓子を食べている。数分後、着替え終わった静香が現れた時は思わず焼き菓子を落としそうになった。

「先輩……なんか似合いすぎてます……」

「そう？あ、思ったより時間食っちゃったね。そろそろ行く？下駄と手下げもあるから持ってたて」

「は……はい」

準備万端となり、二人はお祭りがおこなわれている神社へと向か

った。からんころんという、下駄独特の足音が響く。徐々になぎわう声が大きくなっていく。頭上には赤くやさしく灯る提灯の明かりが、暗くなってきた夜道を明るく照らす。そして顔ってくる祭り独特のにおい。それだけで、朝貴の気分は高まってくる。

「朝貴君はよくお祭り来てた？」

「えと……実は2・3回くらいしか来たことないんです。毎年楽しみにしてても、風邪ひいたりして家から出してもらえなくて。その代わり、家の人が僕のほしいもの買ってきてくれて。それが楽しみだったり……」

「そっか。僕はね、一応毎年行ってるんだ。実はお祭り行こうって淳に提案したのは僕。今年はみんなで行きたいなって」

「どうしてですか？」

「だって……もう今までとは違っちゃうから……」

「え……？」

「あ、この鳥居で待ち合わせだよ。まだちょっと早く来すぎちゃったね」

「え……あ、そうですね……」

なんだろう。さっきの静香先輩。なんかすごい苦しそうだった。せつなくて、苦しそうに悩んでて、どこかあきらめてるような……そんな顔してた。

*** 2 3 * (後書き)**

浴衣の表現とか正直あてずっぽなので、おかしかったりします多分。
それといい加減新学期を始めたいです。

多分次回で祭りは終わりです。

やっと新学期（文化祭編）が始められそうです。

*** 24 * (前書き)**

やっとこれで祭りは終わり。夏も終わりです！

長かった…ただそれだけです……

鳥居のすぐそばで二人は並んで立っていた。待っている間、学校生活の事などのたわいない話をしていた。そんな二人に近づいてきたのは、待っていた清桜たちではなかった。

「君たちかわいいね」

「え？」

「高校生くらい？あれこっちは中学生っぽいし、もしかして姉妹？」

中……中学生だつてえ……失敬な！！れっきとした高校生だい！！

「あの、迷惑なんですけど？それに待ってる人いるんで」

「つれないなあ。それに女の子待たせる男なんて最低じゃない？それより俺らと遊ぼうよ、ねえ」

そう言つて一人の男が朝貴の手をつかんだ。

「やつ……離して……」

ヤダヤダ……また連れてかれちゃうよ……。フランスの時みたい
に……あんなのヤダあ……。

「嫌だ……離して……」

「そんなふるえなくてもいいじゃん。かわいいなあ」

「ちよつと、それ以上その子に……っ」

「いいじゃんいいじゃん、祭りなんだしさあ」

どこがだ。チッ……淳たちはまだなの？でもこれ以上こんなこと
なつてたら朝貴君がかわいそうだし……て、言うかそろそろ泣き出
しそうだし……。しかたない、この恰好じゃあんま力はいんないけ
ど、やるしかなさそう。

「あんたら……いい加減につ……！？」

蹴りだそうと、足に力を入れていた静香は新たな気配を感じてそ
の力を解いた。そしてふつと笑みをこぼす。拉致される恐怖におび
えていた朝貴は今にも目のふちから涙をこぼしそうになっていた。
振りほどこうにも力が強すぎて無理で、どうにもできない無力さに
も泣きたくなっていた。そんな朝貴の肩を後ろから抱き寄せる手が
現れた。そして聞き覚えのある声が聞こえる。

「ねえ、俺の彼女に何してんのかなあ？」

「そうそう、お前らじゃこの子たちの相手にはなれないとおもうぜ
？」

「さつさと立ち去つてよね。ていうか、触らないでよ。きつたない
手でさあ」

その声の主たちの気迫に怖気づいたのか、男たちはすぐに立ち去つ
て行った。それを見てようやく落ち着いた朝貴は自分の後ろを振り
向いた。

「か……会長……」

「ごめーん、遅くなって。あつはは、朝貴また可愛いから連れてか
れそうになつてたね。でももう大丈夫だからさ、泣かないの」
「んう……」

朝貴の眼のふちにたまった涙を清桜は微笑みながら指で拭った。

「遅いし、清桜も淳も」

「電車こんでたんだよ。つか静香、蹴りいれようとしてたな？」

「ばれてたか。だってあのままじゃ本気で朝貴君連れてかれそうだったし。何よりむかつくしね。でもベストタイミングだったよ」

「静香の蹴りいれられちゃ、ここに死体の山ができてたかもねー」

「こわー」

「え……え……」

「ほら、何も知らない朝貴君が話についてけてない」

「静香はね、うちの学校の空手部主将なんだよ、あんな顔してるけど」

「清桜、あんな顔は余計だよ」

「ほえ……やっぱり静香先輩すごい……」

「あれー、朝貴俺はー？」

「なんか言いましたか？」

「やつといつもの朝貴に戻ったようですね」

「あ、榊原先輩……ふぎゅあ！？」

清桜たちとは別に来た良介も来た。だがその時朝貴は誰かに抱きつかれていた。思わず素っ頓狂な声を上げる。

「あ、漣も来たんだ。しかも女装浴衣で」

「べ……別に、着たくて着たわけじゃないし……。ただ良がどうしてもって言うから、だから着ただけだし。違う……良のためでもないんだからね！！」

「ふぎゅー！！」

「どうでもいいですけど、それじゃあ朝貴が胃袋吐き出しますよ、漣」

「あ、忘れてた」

「ぷはあっ！！ていうか、胃袋とかはきませんから！！……えと……はじめまして？」

「ひやまれい檜山^{ヒヤマ} 2年。好きなものは良とあとちいさくてふわふわしててあつたかいの。君とかね」

「え？」

「こらこら、変なこと言わないですよ。朝貴がはてな頭の上に展開してますよ」

ていうか、さりげなく好きな物の中に榊原先輩って言ってたよね。つまり……うん、そういうことだね。もうわかってるんだからね。静香先輩の時と同じだね。うん。なんだろこれ、デートですか？デートしに来たんですか？ならみんなで集まる必要ないんじゃないかなー！

「朝貴ー！朝貴ー！」

「はっ……はい！？」

「何考えごとしてたの？」

「なななな……なんでもないです。って、あれ……あの四人は……」

「ふた組はこれからデートです。てまあ、半分そのつもりだったんだろうけど、俺がいいよって言ったからみんな好き勝手に行っちゃった」

「ええー……」

「俺とじゃいや？」

「っ……」

嫌……じゃないと思う。いやだってね、さっきのナンパの人っちと会長だったら、断然会長でしょ？知り合いだとかそうじゃないとかだけじゃなくて、なんかよくわからないけど。でも、会長がいな。

「さつき怖い思いしたんで、なんかおごってください」

「くすつ、いいよ。なんでもおごってあげる。まずなに食べたい？」

「綿あめ食べたいです！」

「じゃ、いこっか」

朝貴に差し出された右手。思わず見上げた朝貴に清桜はやさしくほほ笑んでいる。その瞬間、遠い記憶の断片が思い起こされる。

『ほら——、そんなところだと風邪ひくよ？』

「朝貴？」

「！え…あ…手、繋ぐんですか？」

「それぐらいはいいでしょ？おごるんだからさ、ね？それに朝貴迷子になっちゃうと誘拐されちゃいそうだしね」

「ほんとに全部おごってくださいね！ていうか、後半いりません！」

「ふふふっ」

二人は、人でにぎわう屋店が立ち並ぶ方へと向かっていった。

* 24 * (後書き)

かわいい子はお持ち帰りされればいい。
いえ何でもありません。

実は空手部主将の静香先輩。

怒らせると一番怖い人だと思っています。 淳頑張れ！

そして登場、良介の恋人現る。

漣君。素直じゃないけど甘えんぼさんのいい子です。

この三組のそれぞれを交えつつ、でも基本は朝貴と清桜ですね。
ほかふた組で何か話書きたいと言ってみたりもする。

まあ、これがどうなるかによりますけどね。

次回から文化祭編です！

*** 25 * (前書き)**

文化祭編です。

時期的には11月なのです。

文化祭って大体10月〜11月くらいですかね。
私の学校は11がつでした。

なので黎明学園も11月にしました。

ですが今回は文化祭にはまだ入ってはいませんね。
書きたいストーリーを交えつつです。

ススキが、穂先を風に揺らしている。秋独特の甘い香りを含んだ風は、少しだけあけている窓から入り込む。庭にあるきんもくせいの香りだろう。だがそれすら自分は実際に見ることはかなわない。畳の上に敷かれた布団の中、小学校低学年くらいの男の子は、その中で顔だけを動かし、あたりを見回していた。そこへ近づくと、あわただしい足音。そしてそれは男の子の部屋の前で立ち止まると、勢いよく障子が開かれた。

「ただいま！」

「おかえり、朝貴」

「調子はどう？まだ熱ある？」

「ん……でもだいぶ楽だから」

そう言つて、布団に横たわっていた男の子は起き上がる。その布団の傍らに、朝貴は腰を下ろした。そして、じっとその男の子の顔を覗き込む。

「何度？」

「え？」

「そういつてるのいつつもだよ？しかも決まって熱あるのにないつていうよね？」

「そんなことないよ……」

男の子は顔を伏せる。明らかに嘘をつくときの癖である。

「何度？」

「……38.4」

「ほらすこいあるじゃん！寝てなよ？」

「わかってるよ……学校どう？」

「今日ね、算数の問題一個あてたんだよ！」

「へえ」

「そだ！おみやげあるんだ！」

「お土産？」

「はい、プリン！」

「これ……」

「今日の給食の残りー！夕貴これ好きでしょ？」

「うん！」

夕貴ゆきと呼ばれたその男の子は、にっこり笑ってそのお土産を受け取った。

「朝貴、僕ね絶対元気になるんだ。そしたらね、朝貴と一緒に学校行けるかな……」

「うん！一緒に行こう！」

「あんたなんか生まれてきちゃいけなかったのよ」

その言葉で、彼は氷ついたかのように動けなくなった。部屋で宿題を片付けていた時だった。後ろからそんな女の声が聞こえた。それがすぐ母親と呼ぶべき存在だと気づく。振り向くと案の定、そこにその人はいた。手に包丁を携えて。料理にしか使われるはずのないそれが、なぜここにあるのかとか、なぜこの人がここに来るのかと

か、彼の頭はそんなことが渦巻いていた。そんな彼を一つの叫び声が現実へと引き戻す。

「逃げて夕貴!!」

「えっ……え……」

目の前が真っ赤になった。ただ眼を離すことができなくて。動くはずの足がなぜか動けなくて。そして、倒れてきた叫び声をあげていた体をただ受け止めた。服にしみ込んでくる生温かい液体。広がる鉄のにおい。そして、その向こうに見える悪魔の顔。否。理性を失った女の顔。それが怒っている顔でも、泣いている顔でもないことが彼にとっては恐怖でしかなかった。彼女は笑っていた。まるで目の前で右往左往と飛んでいるハエを殺したかのように、床を這うゴキブリをたたきつぶしたかのように。彼女の顔には達成感しかなかった。なぜ？あなたが刺したのは、あなたの子なのに。駆けつけた河合達に救い出され、救急車を見送った後で、彼はようやく正気を取り戻した。脳裏に残るは女の狂った笑い声のみ。

【ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ】

「はあっ……はあっ……はあっ……っ……夢……」

アラームが鳴ったのは朝貴が目覚めてから数秒後だった。寮の自室のベットの上でべたつく汗で額にへばりついた前髪を掻きあげて、朝貴は体を起こした。鳴り続けていたアラームを止め、あらがった呼吸をただす。嫌な夢だ。それが過去に起こった出来事なのが性質が悪い。

「……もう、あれから二年になるんだね。早いね、時間がたつのっ

τ
⋮
⌈

*** 25 * (後書き)**

さて、次回からいよいよ文化祭です。

楽しんでいただけたら幸いです。

*** 26 * (前書き)**

やっと文化祭に入ります。

11月に入ったばかりのこの日。やや肌寒くはなったが、この学園にはにぎわいをより一層高めていた。それもそのはず、もうすぐ『黎暁祭』という名の文化祭があるのだ。クラスごとでそれぞれ企画し、準備、当日の運営。みんなの気が高ぶるのもうなづける。そして、朝貴のクラスも例外ではない。今日も午後の時間がHRとしてあてがわれ、『黎暁祭』の計画をすることになっていた。

「文化祭って……どんなことするの？」

「朝貴、中学の時とかやらなかったのか？」

隣の席の及川恵一が驚いた顔で朝貴の方を見てきた。

「中学の時は、あんまり学校行けなかったから。僕これでも体弱いから」

「ふーん。文化祭ってのは、まあいろいろやんだよ」

「いろいろって……」

「クラスごとで店とか開くんだ。喫茶店とか、お化け屋敷とかさ。なんか作って売ってもいいし、体育館借りてなんか演劇とかやってもよし。とにかくまあ、違法性がない限りなんでもいいんだよな」

「へえ……で、うちのクラスは何やるか決まったの？僕それ会長に言わなきゃいけないんだけど」

実は朝貴、今まで1年生じゅうのクラスを回ってきたのだ。1年は朝貴がクラスごとの企画書を回収、それを清桜に提出。2年は淳、3年は良介だ。

「うちはあれ」

「？」

そう言つて、恵一が指差した黒板には喫茶店の文字。

「へえ、喫茶店かあ」

「ただの喫茶店じゃないけどな」

「え……あれ、横になんか書いてある……御伽喫茶？おとぎちやってなに？」

「おとぎ話の格好に仮装して接客するんだと」

「は？おとぎ話！？」

「そ、シンデレラとか、白雪姫とか、そういうの」

「なんでみんなお姫様関係なの？」

「そのほうが盛り上がるって」

「そうかなあ？というか、もう配役とか決めてるのはなんで？そしてなんでぼく、アリスの下に名前があるの！？」

「朝貴いない間にアンケート＋多数決で」

「アリスって……」

「不思議の国のアリス」

「あ、僕生徒会が忙しいからな――！」

「うん、あきらめろ」

「やだああああ――！」

あの僕、これが人生初の文化祭なんですけど。なんでこんな目に会うの――！？

気分が落ち込んだまま、朝貴は企画書を持って生徒会室に着いた。だが、ドアはいまだ開けられない。朝貴のクラスの企画書にはしっかり配役まで事細かに書かれている。これをもしあの会長に見せたら、何と言われるだろうか。いや、結果は見えている。

「朝貴、そんなところで立ってないで、中に入らないんですか？」

「さ……榊原先輩！……」

「どうかしました？あ、ちゃんと企画書集めてきたんですね」

といて、朝貴の手から企画書を受け取る良介。良介の出現に少なからず驚いていた朝貴は、それに反応するのが遅れた。気付いた時には良介はもう生徒会室に入っていた。

「ま……待ってください、榊原先輩！！それ、会長に渡すのは……
つてぎゃああああああああああああ！！」

だが時すでに遅く、清桜の手にはしっかり企画書が渡っていた。

「え、なんで俺に渡すのめなの？」

「まだ遅くない……会長僕のクラスの企画書途中なんで、返してくださいってさつきクラス委員がつ……って見ないでええええ！！」

「……御伽喫茶？」「」

えつぐえつぐ……3人してみるのやめてくださいよお……。

「へえ、なかなか面白そうなことするね。朝貴のクラスはこれオツケー！」

「そんな簡単に！？てか、会長なんかイキイキしてるう！！」

「当日絶対俺のここに来てね？てか、会いにいくから、ちゃんとアリスのカッコしててね？」

「うぎゃあああああ！！」

なんかいろいろ心配になってきた朝貴なのだった。

文化祭は、参加する方は楽しいし、当日はそれまでの苦勞とか忘れるほど盛り上がる。そういう行事だ。だが、それまでの忙しさはそれこそ地獄だ。僕は生徒会として当日にかかる経費とかの計算ややりくりなどをまとめたりしなきゃならないし、クラスの出し物の御伽喫茶の準備も少しながら手伝わなければならない。おかげでもう寮の自分の部屋に帰ったとたん寝てしまうほどである。そして、文化祭まで残り5日となったこの日。とうとうこの日が来てしまった。

「衣装合わせなんかなくていいよ……」

「そうもいかないんじゃないか？ やっぱほら、サイズとかの関係で」

ちなみに、どうやら恵一もアリス組のようだ。他には白雪姫、シンデレラ、赤ずきんちゃんなどなどメジャーなおとぎ話がある。というか、アリスばつかそんなにたくさんいるんだろうか。なら自分はいなくてもよさそうな気さえする。もちろんクラス全員が仮装するわけではない。喫茶店なので、飲み物や軽食などを準備するキッチン係もいる。朝貴はそれほど料理ができるわけではないが、どちらかといえばそっちになりたかった。だがまあ、決まってしまったことは今さら覆せはしないだろう。朝貴は覚悟を決め、パイプの衣装がけにつるされたアリスの衣装から一着をつかむとそのまま別教室へと移動し着替えた。

元の教室に戻った朝貴は、そこですでに着替えを済ませて戻ってきていた恵一の姿を見て、思わず固まった。かれの格好はなんだか洒落たシルクハットにやや派手な燕尾服。よく絵本のアリスを見るというあの帽子屋ではないか？

「あのさ、それってまさか……」

「うおっ、って朝貴か？うわーやっぱ似合うんだな」

「似合わない！！ていうか、それって帽子屋の仮装！？」

「そうだけど？」

「なんで？アリス組ってみんなでアリスの格好するんじゃないの！？」

「そんなわけないよ。アリスの登場人物の仮装をするんだよ。だからほら、白雪姫組は白雪姫以外にも王子とか魔女とか小人とか居るだろ？アリス組も今日配役決めようって言うってたんだけど、朝貴張り切ってアリス持って行くから……」

「ええええええええええええ！？」

聞いてないよそんなの！！何？僕が生徒会の仕事してる間に話してたの！？ずるい！ていうか、教えてくれたっていいのに！！これじゃあまるで自分で墓穴ほ……掘ったね。うん、ほっちゃったよ。

「アリスなんてヤダよお!! うわああああん!!」

「大丈夫だって、ノンケの俺から見ても可愛いから！」

「それほめてないよお!!」

「北條！」

「何!？」

「これ悪いけど生徒会室に提出してくれないかー！」

「わかつた……」

クラス委員に渡された書類を半放心状態で受け取ってしまった朝貴は、何も考えずに生徒会室まで来てしまった。アリスの仮装のまま。ちなみに今週は文化祭準備期間のため、授業は免除になっている。したがって必然と生徒会室には生徒会メンバーが必ず一人はいるのだ。

「あ、会長。これうちのクラスのクラス委員から……」

「あ……朝貴？」

「え？」

「何その格好……」

「恰好……あ……ちょ……ちが、これはですね……その……」

「何それすつごくかわいい……」

「はい？」

「想像してたよりかわいい。うん俺今死んでもいいかも」

なんか物騒なことサラツと言った——！！てか想像ってなんですか！？想像したんですか！なんですかそれ僕に断りもなく！！↑……て、違う違うそうじゃなくて。なんでぼくわざわざ見せに来たみたいに来ちゃったわけ！？うわーん、僕の馬鹿ー！！

「可愛くないですし、変な想像しないでくださいよー！！」

「だってねえ、それが今年の文化祭で唯一の楽しみだもん俺。」

もつと他に楽しみを見つけてください。

とか何とか考えていた朝貴の方に、清桜はゆっくりと近づいて行った。それに気付いた朝貴は思わず体をこわばらせる。そして清桜は朝貴の方に向かって手を伸ばしてきた。朝貴はその瞬間目をつぶって体を萎縮させた。

「何怖がつてるの？俺そんな発情してません。頭のリボン曲がつてるよ？」

「ほえ？あ、ありがとうございます？」

「なんで疑問形なわけ？いーなあ、朝貴がいるクラス楽しそうで」

「そついえば、会長のクラスって何やるんですか？」

「え？……秘密」

「え——何ですかー?」

「なんででも」

「教えてくれたっていいじゃないですかあ!」

「だーめ」

そんなことを繰り返していた時だった。生徒会室に新たな来客が来た。

「清桜、教室の飾りだけど布少し足りないんだけど、新しく買うつて方向で行くつていうからこれから買い出ししてくる。って、朝貴君、可愛いー!」

「し……静香先輩……」

やめてー!これ以上僕を見ないでー!!

「清桜から話聞いてたけど、朝貴君アリス似合ってるよ!」

「先輩それほめてないです」

「ほめてるよ!きれい、可愛い、抱きつきたい!」

「ええ!?!」

「静香、抱きつくのは無し」

「清桜のけち。ま、仕方ないか。浴衣着た時もそうだけど、やっぱり朝貴君元がいいんだよね。だからなに来てても可愛い……じゃなかった、似合うんだよ」

「今かわいって言った……。っていうか、静香先輩と会長って同じクラスだったんですか?」

「そうだよー。あれ、言わないつけ祭りの時」

「初耳ですもん」

「あ、静香。朝貴にうちのクラスの催し、言わないでね。当日まで内緒にしたいから」

「オッケー。じゃ僕買い出しに行くから」

ていうか、会長はどれだけ僕に会長のクラスが何やるか秘密にしたいんですか。

* 27 * (後書き)

静先輩は朝貴のことを可愛い後輩って感じに思ってるだけです。

静香×朝貴はない。ないない。

でも清桜と取り合いさせたい。

抱きつくなって言われながら、目の前で朝貴をむぎゅってしてほしい。

きつと楽しいだろうな。

まあ、そんなシーン書けそうにないですけど。

以上勝手な妄想でした。すみません。

*** 2 8 ***
(前書き)

文化祭です！

さて、とうとうやってきてしまいました『黎暁祭』。開幕しております！

「いらっしやいませー、御伽の世界へようこそ！」

アリス朝貴は朝から教室内を所狭しと駆けまわっていた。もちろんあのアリスの格好である。注文を聞いて、出来上がったものをお客さんの下に届ける。それが結構ハードだったりする。ちなみに注文時にお客さんにはアンケートが渡され、この中で一番仮装が似合っている人の名前を書いて帰る際に出していくということをしている。まあ、どれだけお客さんが来たかを調べるためだが、そのせいで教室の外の壁にはなぜか『御伽喫茶・人気仮装店員ランキング』なるものが貼られていた。そしてダントツトップはもちろん、アリス朝貴である。

「どっかのホストクラブみたいだ……ならいいんだけどなあ……」

「アリス人気じゃん」

「恵一、それ全然嬉しくない」

「えーそう？」

「そっだよ！ほらこれ、9番テーブル！」

「はいはい」

恵一に注文の品を押し付ける。仕切りで仕切られた裏方で少しの休憩をとる。こんなにハードとは思わなかったのだ。なんかすこし、ファミレスの店員さんを尊敬します。ちなみに、朝貴たちホールスタッフは午前と午後に分かれていて、正午で区切りをつけ交代制に

していた。

「朝貴ー！そのまま午後の奴とチェンジしていいってさ！」

「ほんとー！やったあ！じゃ、帽子屋さん頑張れー！」

「言つとくけど、着替えちゃだめだって知ってるか」

「え……何それ知らない……」

「宣伝だよ宣伝！」

まだお客さん呼び込みたいのお！？こんな格好で校内歩きたくないよお。でも、D組のたこ焼き食べたいし、確か外にも店出てるんだよね。部活でなんかやってる人もいるからお店巡りはしたい……でもアリス……。

「あのさ……恵一。一生のお願いがあるんだけど……」

「アリスと帽子屋変われとか無理だから！大丈夫だって、朝貴マジ似合ってるって言ってるだろ？」

「うう……」

「それに俺のじゃ朝貴ぶつかぶかだぞ？」

「だからなんか一言余分だよ！！いいもん、これで行くからいいもん！！」

「おう、しっかり宣伝してきてな！」

教室を後にした朝貴はそのままずD組に向かった。ひときわ注目をされつつ、たこ焼きを購入する。

「おいしいけど……もうやだよお……」

タコ焼きは申し分なくおいしいのだが、なにせ朝貴は目立ってしまっていた。もとから容姿のせいで目立っていたのだが、さらに今のアリスの格好はさらに人の視線を集めていた。全く嬉しくないこ

とこの上ない。さっきなんか写真部に撮られてしまった。ああ……
今月の写真部が作る校内新聞に載ってしまうだろう。見つけたら速
攻剥がしにかかるのは駄目だろうか。駄目だろうね。

そんなことを考えていた朝貴は、後ろからきた誰かに背を叩かれ
た。こんなに手加減無しで叩いてくる人は一人しかいない。

「だから、痛いですって！青葉先輩！」

「にひひ！アリス見つけ！！」

「アリス言わないでくださいよ！！」

「気に入って脱ぎたくないからそんな恰好してるんだろ？」

「そんなわけなんですよ！宣伝です宣伝」

「ああゝなるほどな。歩く看板みたいな感じが！」

「何かそれ嫌な表現ですね……。あれ、そういえば青葉先輩これか
らどこに？」

「あー、静香のクラス。来いって言われてるし、なんか面白そーな
ことやってんだよな」

「面白そうなことって……先輩、会長のクラス何やるか知ってるん
ですか？」

「あれ、朝貴知らなかったのか？」

「会長が内緒って言って、結局教えてもらえなかったんです」

「あー、なるほど。じゃ、一緒に来るか？つか、行こうぜ！」

「え、わ……ちよっと！！」

活き活きして階段を上る淳に手をひかれて、朝貴は清桜のクラス
へと向かった。

*** 28 * (後書き)**

文化祭は後3、4話で終わりです。

そしたらストーリーを進めていこうと思います。

おそらくぐんつと暗い話になっちゃうかもしれないです。

そして清桜と朝貴の関係・・・

縮まってほしいんですけど!!

あと、ほかのふた組も番外編とかで書きたいですね。

そう言ってて書いてないの多いですけど・・・

* 29 * (前書き)

遅くなってしまうてますね。

清桜&静香のクラスの出し物が決まらず、結果こうなりました。

私に通ってた学校は文化祭というよりもバザーっぽかったので、こういう模擬店とかは経験がありません……なんてことだ……
なので、すべて私の空想……いえ妄想です。

会長と静香先輩のクラスにやってきた。そして、朝貴は後悔する。来てしまったことにある。教室のドアには黒いカーテンが引かれ外からは中の様子を見ることはできない。だが明らかに中は薄暗いのがわかる。ドアの前には不気味に枝を垂らしている柳の木の模型。そしてどうやっているのか浮遊する火の玉……。

「ああああ……青葉先輩？これってまさか……おおおおお」
「お化け屋敷だぜ」

「ぼ……僕用事思い出したのでこれで……」

「ばればれだつての。何だよ朝貴、お化け屋敷だめか？」

「だっ……ダメじゃないですけど……苦手なだけです」

「そういうのだめって言うんだぜ？なに言ってるんだよ、ここまで来たんだし中入って会長と静香に会いに行こうぜ」

「せ……先輩だけ行ってきてくださいよお」

「一人でお化け屋敷とかむなしいだろ。ちようど誰か誘おうって思ってたしき、ちようどいいじゃんか！」

「嫌ですう！！帰りたいです！！ヤダっ……お化けやだあ！！」

だが、抵抗する朝貴を、淳はなんなくお化け屋敷の中へと連れこんでしまった。入った瞬間、朝貴はバツと身をひるがえし、淳の後ろへと隠れた。ぎゅっと淳の着ている制服を掴む。

「案外後ろから来たりして」

「やなこと言わないでくださいよ……ふぎゃあああ！！」

「ぶぶっ、まじびびってんの」

「も……ヤダ帰りたいよ」

「まだ入ったばっかじゃんか」
「ですけどっ……こわっ……」

そんな朝貴の後ろからささやき声が聞こえてきた。それもものすごい至近距離からである。

「お前の心臓をおくれえ……」

「ひにゃあああああああああああああああ！！」

「静香」

「え……ふえ？」

あ、ほんとだ。なんかすごい頭から血を流してるっていうすごく怖い格好してるけど、よく見たら静先輩だ。なーんだ、びっくりした。

「んふふ、朝貴君お化けだめなんだ。ぴったりだね」

「ぴ……ぴったりってなんですかっ」

「その格好だとお化けの世界に迷い込んだアリスって感じもするしね」

「はっ！そういえばこの格好だった……」

「怖がつて淳に抱きついちゃうのもいいね。出来れば僕に来てくれたらよかったのにな」

「え……抱きつ……ぎゃあああああ！！」

「ちょ、ぎゃあってなんだよ！！ひでーな朝貴！！」

「ご……ごめんなさい！！」

あわてて淳から離れた朝貴。だがどんっとかかにぶつかってしまった。

「ふえ？」

「お皿が……1まい、2まい……」

「ひにゅあああああああああああ！！？」

「清桜、朝貴君倒れちゃうよ？」

「はははっ、朝貴俺だよ俺」

「か……かいちょ……？」

怖いよ。会長の格好も怖いよ。どんなのかつて？ご想像にお任せします。僕の口からはとつてもじゃないけど言えませんー！！会長だつてわかつた後でもなんか怖いよ！！

「朝貴お化けだめなの知つてたから教えなかつたのに。淳つたらつれてきちゃうんだもんねえ」

「お化け屋敷やるならそう言つてくださいよ！！」

「あれ、来たかつたの？」

「絶対にここには近づかなかつたです！！」

「だよねー。あ、此処まだ最後じゃないからね。うちのクラス総勢39名と同じ数だけのお化けがいるから。あ、同じ数じゃないか、音響とかいるし……」

「30体くらいかな、お化けの数。朝貴君頑張れ！」

「なら引き返した方が……」

「お引き返しはご遠慮くださーい！」

「そんなぁ！！」

お伽喫茶で走り回っていた以上にへとへとになって、お化け屋敷から生還したことは言うまでもないのです。

*** 29 * (後書き)**

清桜も静香もきつと美形なお化けだっただろうなって思います。

そして、朝貴はお化け屋敷でも浮いてたでしょう。

みなさん、まだ朝貴はアリスのままですよ。

お忘れなく↑

日が西に傾き完全に地平線の彼方へと消えた。夜空にはまばらに星の光がきらめいている。盛り上がりを見せた『黎明祭』も終わりを迎えようとしていた。今は全校生徒が一つの体育館に集まり、後夜祭を楽しんでいた。いつもは何もない普通の体育館なのだが、今日は深紅の布で飾り立てられ、床にはじゅうたんまで敷かれていて、とてもそのようには見えなかった。館内には丸いテーブルに白いテーブルクロスがかけられたものが数十個置かれ、軽食や飲み物が置かれていた。制服に着替えた朝貴はこれまた制服に着替えている恵一とともに、後夜祭をそれなりに楽しんでいた。そこらへんの軽食をぱくつきつつ、近くにあったグラスに入った飲み物を飲む。

「文化祭って大変なんだね」

「やっとなかったか？それにしてもうちのクラス大繁盛だったな。」

午後來たお客さん、アリスいないのーって残念がってたぜ？」

「うっ……」

「そしたら写真部の人たちがきてさ、朝貴の写真焼き増ししたやつ……500枚くらいかな……それ、勝手に配っちゃった！」

「は？はあああああああああああ！？写真って何？まさかあのアリス着てるの取られた奴！？現像するの早っ！？て、500枚全部！？」

「いや、クラスにあと30枚くらい残ってるけど、欲しい？」

「いらないよ！！うわあああ……あんな格好残しなくなかったのに……」

「そっいえば、その写真、会長ももらってったけど……」

「え？」

「あと、三王先輩だっけ？あの空手部主将の。あの人も10枚くら

い……」

「恵一、僕ちよつと用事が出来たから行ってくるね。うん、もしかしたら戻ってこないかもしれないけど、その時は気にしないでいいからね」

「おう、俺ほかのやつのとこ行ってくつからいいぜ。がんばってこいよー!」

何をどう頑張るのかは不明だがとりあえず朝貴は、この広い体育館の中を探しに行くことにした。出来ればその写真は回収したいものだ。うん、そして焚火でもして燃やしてしまいたい。

しかしこの黎明学園。生徒の数がやたらと多い。その中からあの2人を探し出すのは骨が折れることこの上ない。あたりをきよきよと見回しつつ、朝貴は体育館の中を徘徊する。しかし、何か不思議な気分になっているのは気のせいだろうか。床が柔らかいというか、ぐらぐら揺れているような気もするし、気を抜くとポケっとしてしまう。疲れが出てきてるのだろう。そうおもしろい、朝貴はさらに歩を進めた。それがいけなかったのだろうか。歩を進めていた朝貴の足がもつれた。

「うきやつ!?!」

バランスを崩し、朝貴は片足で何とか踏ん張ろうとするが、どんな壁の方へ進んでしまう。そしてとうとう体が傾き倒れ込む。が、そこにあつたやや小さい窓がなぜかあいていて、朝貴の小柄な体は、そこをうまく通り、外へと飛び出してしまった。

「うやああああ!?!?」

「はあ?ちょ……」

朝貴はそのまま数十センチの高さから落ちた。だが、硬い地面に

は落ちず、何か……というよりは誰かの上に落ちた。

「あたたたた……」

「お前……いい度胸してんなあ？」

「え……なんでこんなところに……？」

金髪の人とはあんまりいい思い出がないんですが。この学園の風紀委員長さんがいました。しかも僕、その上にまたがっちゃってます。どうしよう。怖いんですけど。にらんできてるんですけど。僕会長と静香先輩探してただけなんですけど、なんでこんな怖い危険な人に会わなきゃいけないんですかつ！！

「俺がどこにしようと思手だろ？風紀委員はそれなりにいろいろ仕事があつたんだよ、もう文化祭も終わつたんだ、静かにゆっくりさせろ」

「じゃ……じゃあ、寮に戻ればいいんじゃないんですか？あ……」

「1年のくせに生意気言うようになったなあ？」

この人と話すときは言葉を選んだほうがいいねっ！

「じゃ、僕これで……」

「ほお？上級生にぶつか……いや、のしかかってきて謝罪の言葉もねえのか？」

「うぐう……ごめんなさい。じゃ、さようなら」

あの、あやまつたんですけど。何で離してくれないんですかあ！？

「あのお……」

「お前、やっぱ目、青いんだな」

「え？」

その言葉に驚いた朝貴の瞳は今、片方が黒。そして、もう片方は澄んだ空色になっていた。

* 30 * (後書き)

龍弥の口悪すぎますね。不良だな。

そして、口悪いキャラってセリフが一発変換できなくてめんどくさいです。

でも今回の朝貴が体育館の窓から落ちて、龍弥の上にまたがっちゃう話は描きたかったので、書いてよかったです。

龍弥も結構朝貴とは関係がないわけじゃないので、これから出番があります。

ですが相変わらずの危険人物なので、どうなることやら……。

そういえば、このお話って登場人物紹介ありませんでしたね。

話のラストで、朝貴の目が青いとか書いてますが……

清桜の髪が紫だとか、龍弥は金だとかありますが、朝貴ってそんなに外見の話書いてた……気がしません。探せばあるかもしれませんが……

実はカラコン入れてました。

黒い奴です。もとは両方青い澄んだ空色？の瞳です。

この理由も後にかけていけたらいいですね。

*** 3 1 * (前書き)**

久々に、風紀委員長の龍弥を書きましたね。

そういえばこいつ、何も風紀委員らしい事してないですね。

まあ、いいか。↑

此処からいよいよラストに向かって一直線ですね。

龍弥が言ったその言葉に、朝貴は思わず瞳の近くに手を持って行った。だが自分では自分の瞳の色の変化には気づかない。いや、むしろこの瞳の色こそ元の色で、元に戻ったと言った方がいいのかもしれない。もともと黒髪で黒眼ではなかった。明るい茶髪に、澄んだ空のような青い瞳だった。でもこの学園に入学するために、髪を染め、カラーコンタクトを入れる必要があった。それよりも、さっきの龍弥の言葉が気にかかる。彼はこう言った。“やっぱり”と。それは彼が以前から朝貴が青い瞳であることを知っていたということになるのではないか。

「なんで……」

「はじめてこの学園で会ったときいったら？俺はお前の彼氏と同じだと」

「彼氏なんかないです……」

「今そこは大事じゃねーだろ。俺はお前のこと知ってるぜ？お前の出生、家の事、二年前のあの出来事も……お前がこの学園に入らなきゃいけないってわけもな」

「な……」

どうして？何でこの人がそこまで知ってるの？それに……二年前のあの出来事は、家の人たち以外誰も知らないはず……。少なくともこの学園にいる人たちは誰一人として知らないはずなんだ。なのに、この人は知っているという。ほんとなんだろうか……。

「俺はこの学園に、まあ多少家の力つかって入ったから？どこかくそ馬鹿みたいに二年もほったらかしてはなかったから知ってたんだ

けど。お前、どの面下げてあいつになりすまして俺の前に現れたわけ？」

「なりすましてって……」

「とぼけんな。あいつは純日本人。そんな青い目してるわけねーだろ。確かお前の母親は……」

「違う……違う……僕のお母さんは……あの人……」

「確かにお前のそのなりすましは完璧さ。もともと顔の造形は瓜二つだからな？ けどなあ……」

次々と吐きだされる言葉が、先ほどから朝貴の頭の中に渦巻いている。それだからだろうか、頭がさつきからすつきりしない。もやがかかったようにうつろで、視界すら歪んでくる。

「あいつは自分のこと『僕』なんて言わねーんだよ」

「わかってるよ？ それくらいは……わかってるもん……らけるさあ……『俺』って言ったたら……んう……僕じゃなくなっちゃうから……だから……そりえだけは……らめ……なんらって……」

「なんらって……なんか呂律回ってねーだろ？」

「くらくらするのゝあははっ……」

「は？」

「ぼつかぼかのくらくら」

「まさか……。おい、お前中でなんか飲んだか？」

「んう？ そーいえはねえ……ジューズ飲んだよ」

「酒だな……後で取り締まるか……」

「んひゅう……」

そこで朝貴は、まるで家電の電源が落ちるようにぷつんと眠ってしまった。そのまま、龍弥の上に倒れ込む。その様子に龍弥はため息をつきつつ、朝貴を抱えたまま上体を起こした。腕の中で眠る酔っぱらいはすやすやと穏やかな寝息を立てていた。瞳を瞑ったその

姿は本当に瓜二つだった。

誰のせいだとか、そんなことはどうでもいい。ただ、目が覚めてもう一度あの前と変わらぬ姿を見せてほしいだけだから。

「さて、こいつの保護者を呼び出すか……」

龍弥はポケットから携帯を取り出すと、電話をかけた。その数分後、その場に息を切らせて清桜が現れた。

「何今のふざけた呼び出し方」

「あと数分遅かったらこいつ今頃服着てなかったかもなあ？」

「さっさと返してくれない？」

「はっ。2年もほったらかして、それで今はそれを補おうってか？」

「何を……？」

「知らねーよなあ？お前が、ほったらかさなかったらこいつがこんな傷付いたりも、記憶をなくすこともなかったのにな」

「記憶を……なくした？」

「お前、こいつが自分のこと覚えてないのは、ほったらかしにしてそれにこいつが怒ったからとか思ってたのか？まあ、あながち間違っちゃいねーけどな。人間はな、強い衝撃とかショックから自分を勝手に守るように働くんだ。こいつの場合、それが脳に起こったのさ。記憶をなくす。それもある一定の時期、人物に特定されて。だからお前のことも何も覚えてないのさ。言ってる意味わかるか？」

「……」

「だがそれでもあの出来事だけは忘れられず、今もこいつの中に残ってる。だからこいつは今ここにいていいってもいい」

「なぜそこまであんたが知ってるのさ」

「俺はお前と同じ立場の人間だからな」

「何？」

「峰城家は、近衛家と同じ、北條家の分家だ。そういえばなんと

く想像はつくだろ？」

「まさか……朝貴の……」

「あんしんしな、こいつには全くこれっぽっちも興味がない。今は仕方なく表向きでこんな風に世話焼いてやってるが、本来はお前の仕事だろ？せいぜい2年のブランクでも埋めれるようにすんだな」

そう言って、龍弥は清桜に朝貴を押しつけ、そのまま立ち去って行った。

* 3 1 * (後書き)

話の中で、未成年の飲酒表現がありますが20歳未満の方は、現実の世界では飲酒しないよう法律で禁止されております。決して、未成年の飲酒を推奨してはおりませんので、決して飲まれないようお願いいたします。成長によくないよ。

というかですね、別に朝貴を酔っ払せる必要はなかったと思うんですけどね。

この話の下書き段階では、そうなってて、この後寝てもらって清桜に迎えに来てもらう必要があったので、なら酔っぱらってもらおうかと思ったわけです。

まあ、今後の展開にもそのほうがつなげやすいかなと、思ったわけです。

決して、酔っぱらってろれつ回ってない朝貴が書きたかったわけでもないし、龍弥に襲わせようかとかも思っていないですよ!!むしろそっちも描きたかったです。

げふんげふんっ!!

最近筆が乗ってきたというか、どんどん続きが書けますね。うれしいことです。

息抜きに淳と静香、良介と漑も書けたらいいなって思ってるんですが。

淳&静香は書けそうですが、良介と漑がね……

漑の性格がいまいちよくわからないので、書けるか不安です。

頑張ってキャラ作ってみようと思います。

でもまずは、清桜と朝貴の決着?をつけないといけませんので!!

*** 3 2 * (前書き)**

前回で一応文化祭編は終わりです。

いよいよ最終章ですね。

一応今回からのやつは真実編というくりにしたいと思います。

今までしつこく出していた伏線を少しでも解消していきたいと思います。

目が覚めた感覚。だが、目が開くまでの覚醒ではないようで、冷たい感触が頬の下にあった。ふんわりとしたそれは優しく朝貴の頭を支えている。ゆっくりと徐々に目が開き、自分がベッドの上に寝ていることに気がつく。だが、そこは自分の部屋のベッドでも保健室特有のあのベッドでもなく、他人の生活感あふれるベッドだった。ゆっくりと体を起こし、その部屋を見回す。そこはどこかの寮の部屋のようなだった。それも生徒会専用の少し広めな部屋で、朝貴の部屋のつくりと似通っていた。つまり生徒会のメンバーの誰かの部屋ということとは容易に考え付いた。そして、朝貴にはなぜか、この部屋の主がわかった気がした。だが、その人物の姿がない。ベッドには朝貴一人しかない。どこかに出かけているのだろうか。ふとそう思ったが、ベッドのそばの机に置かれていた自分の携帯の時計は朝の6時前をさしている。こんな朝早くから起きて出かけるような人ではないと思いたくはない。ということは、この部屋に入るだろう。だが、シャワーを浴びている音もしない。とりあえず朝貴はベッドから抜け出した。とても酔っ払って寝てしまったとは思えないほど、朝貴の頭はすっきりしていた。

隣の部屋は、朝貴の部屋と同じくリビングスペースになっていた。携帯を握りしめつつ、リビングを進む。するとかすかにだが聞こえてくる寝息。それは、リビング中央付近に置かれたソファからだった。そつとそこを覗き込むと、案の定、毛布にくるまった紫色の髪の毛が見えた。その姿を見つけて、朝貴はふつと笑みをこぼした。やはりここは清桜の部屋だったのだと。そつと、起こさないように気をつけて、朝貴は正面に回り込んだ。そしてしゃがみこんで寝ている清桜の寝顔をのぞきこむ。すっかり熟睡しているようで、数十センチという距離に近づいても起きる様子はない。

こんなところで寝てるなんて……。別に、一緒のベッドで寝るだ

けなら構わないのに。それにこの部屋はこの人のなんだから、普通
此処に寝るのは僕なんじゃないのだろうか。それなのに、この人は
此処で寝てる。なんで？僕が嫌がると思ったから？それとも、一緒
に寝るのがいやだったから？僕が僕だから？

そう思うと、心が苦しくなる。心が痛む。でも、それは仕方がな
いことだと、今まで言い聞かせてきた。自分自身に、強く、強く。
何度も何度も。この人が好きなのは朝貴だと。この人が見ているの
は僕じゃないんだと。僕は誰からも存在を認められてはいないんだ
と。そのたびにのしかかってくる。そして、嫌になる。何で僕此処
にいるんだろうと。なんでぼくは僕なんだろうと。それが嫌で嫌で
たまらなかった。もし僕が僕じゃなかったら、今とは違った暮らし
をしていたんだろう。こんなにも苦しまなくて、家に帰りたくない
とも思わないで、この暖かい場所に入れたんだろう。

突然、手の中にあつた携帯が震えだした。それに驚き思わず叫び
声をあげえそうになったが、何とか押しとどめた。いまだにふるえ
ていることから、どうやら電話らしい。だが、こんな朝や訳から一
体誰なのだろうか。そう思いつつ、寝ている清桜の迷惑にならない
よう、窓の方へと離れる。そして、通話ボタンを押し、声を出来る
だけおとして電話に出る。

「もしもし？」

『もしもし、朝早くからすみません、起こしてしまいましたか？』
「河合さん？」

電話は、河合からだった。受話器の向こうの河合は、どこかあわ
てていて、そして嬉しそうでもあった。

「どうかしたんですか？」

『驚かないでくださいね？——さっき、目を覚ましたと病院か
ら連絡が——』

「え……」

それは、一番聞きたくて、聞きたくなかった知らせだった。全身から力が抜けていくかのように朝貴はその場にしゃがみこんだ。カーテンの間から昇ったばかりの朝日の光が朝貴の顔を照らしている。その顔はひどく悲しげで、そしてどこか安心した顔だった。

もう僕は此处にいらなくなつた。もう、此处に僕がいる必要はなくなつた。もう僕は必要なくなつた。

別れの時間ときはもうすぐそこまで迫っていた。いきなりの事態に、朝貴は呆然とした。力が抜けた朝貴の手から、携帯が簡単に抜き取られる。呆然とする視界のすみで、朝貴は確かに見た。誰かの手が携帯を掴んでいるのを。誰かなどすでにわかつてはいた。清桜以外いない。彼は、何かを河合と話していた。口調からしてどうやら知り合いのようだった。そのことに半ば疑問を抱いている間に電話は終わったようで清桜は電話を閉じた。そして立ち上がると、朝貴に手をさしのべる。

「じゃあ、行こうか病院に」

震えが止まらない手で朝貴はその手を取った。そして朝貴は清桜が呼んだ車で病院へと向かった。

病院に付いた。車から降りた二人は病院の入口へと向かっていく。エレベーターで7階へと昇り、朝貴は迷わずとある一室に向かつていく。その横には清桜もいた。そして目的の部屋の前に付いた。名前の表示もない部屋。その部屋の前で朝貴は固まってしまった。会いたい相手がいる。でも、会うのが怖い。会いたくて、話したくてたまらない半面、恨まれて嫌われているんじゃないかとも思う。それが怖い。本当はあつてはいけないのではないかとも思う。けど、それでも一度だけでもいいから会わなければいけないとも思う。あつて、謝らなければならぬ。朝貴は勇気を出してその部屋のドアをノックした。すぐにドアが開き、顔をのぞかせたのは河合だった。朝貴の姿を見て、河合はふつと笑みをこぼした。まるでできたことを喜んでいようだった。

「よかった、来てくれて。それだけでもうれしいですよ」

「うん……」

「じゃ、俺は外で待つてるからね」

「あ、会長……」

そう言つて、清桜は行つてしまった。河合もまたその場を去つていく。この場にいるのは朝貴とそしてもう一人だけである。朝貴は静かにドアを閉めた。そして天井から下がっているカーテンの隙間から中へと入る。その中にあるベッドの上の人物は確かに目を開けていた。二人の視線が交差する。

少しやつれてはいるが、そのほかはあまり変わっていない。つややかな黒髪。夜空のような漆黒の瞳。自分と瓜二つといてもいい容姿を持った大事な人。ベッドの傍らに朝貴は何とか立った。そん

な朝貴を見て、ベッドの上の人はにこつと笑った。

「イメチェン？髪まっくろにしちゃったの？“俺”茶髪のほうが似合うと思うんだけどな」

「うん……まあね……」

「なに？どうかしたの？具合悪い？何なら一緒に寝る？」

「そうじゃないよ……最近元気なんだ」

「そっか、じゃ俺のせいかな」

「ちがっ」

「……おはよ、“夕貴”」

「……おはよう……遅いよ起きるの……“朝貴”」

「あっはは、そうだね。なんか逆になったね。いつもは俺がこうして寝てた夕貴におはようって上から言ってたのに。今は夕貴が上だね」

「そうだね……ごめん……朝貴。僕のせいだよ。僕のせいで朝貴は……2年もこんなところで……」

「ちがう、あれは俺のせい。夕貴は何にも悪くないよ」

「でもっ……」

「それでも俺のせいじゃないって言うなら、あの女のせいかな。とにかく、夕貴は何にも悪くないから」

そういつて朝貴はにこつと笑った。

「それより、あの女まだ夕貴のこと認めてないの？」

「あの女って、あの人は朝貴のお母さんでしょ？そんな言い方……」

「俺は、夕貴のことをいつまでも認めないあの女のこと何か母親だつて認めない！もしかして、黒髪にしたのって、あの女が夕貴に俺の身代わりでもさせてたの？ね、そうでしょ？」

「……」

「そうなんだね。まったく……ふざけんなあの女！！何でそんなま

ねさせるわけ！！夕貴は夕貴なんだ！それを、俺にさせて生活させるなんて……夕貴にだっていろいろやりたいことあるのに！！」

「でも……僕のせいで朝貴入院することになったんだから……これくらいは……」

「ダメだよ！！少なくとも、俺はそんなの嫌だ！！夕貴には夕貴でいてほしい！！俺の身代わりとか、そんなのしなくていいんだよ！！」

「朝貴……」

「つらい思いさせてごめんな？あのとき助けたの、逆に苦しめてたな。でも、あのとき助けたの俺後悔してないから。夕貴がいなくなること比べたら、俺の2年でも10年でもどうなってもいいから生きててくれてありがとう、夕貴」

「ッ……何言ってるの、そんなの僕のセリフだよ」

「そう？」

病室のカーテンの中で、僕らは久しぶりに笑いあった。

「じゃ、僕そろそろ行くね。学校の外出届の時間もあるし」

「そっか。うん、また来てよ。しばらく検査とかリハビリでこっから出らんないからつまないんだ」

「うん、じゃまたね」

「今度は土産買ってきて！！」

「はいはい」

そう言っただけ夕貴は病室を後にし、外で待つ清桜のもとに向かった。ある覚悟を決めて。

* 3 3 * (後書き)

ということ、ようやくここまでこれた！と、ひとり安心しております。

最後の登場人物になるであろう、朝貴がようやく登場してくれました。

で、今まで『朝貴』として登場していたのは

『夕貴』のほうです。だから朝貴だもんね、とかそういうことをばやいてたわけです。

次回、2年前の出来事とか明らかにするだろうと思います。

夕貴が立ち去った後の病室に、新たな来客が訪れていた。ノックもせずに入ったのにもかかわらず、中にいた朝貴はその来訪がわかっていたかのように出迎えた。

「やっぱり来たんだ。河合さんが教えた？」

「まあな」

「今まで、俺との約束……守ってくれたんだね」

「全く、お前はどこまであいつのこと……」

「大事なんだ。こんなこと言ったら怒るかも知れないけど……自分よりも、大事だから」

ゆっくりと朝貴は体を起こす。久しぶりに起こすためかふらつくその体を、来客は抱きしめた。朝貴もまた、彼の背中にしがみつく。久しぶりに感じるお互いの感触に、しばらく静かな時が過ぎた。そして、朝貴が静かに口を開く。

「ありがとう、龍弥」

「ったく、お前が死んだら俺は……」

「おつかないこと言わないでっ。ちゃんと生きてるだろ？それに俺まだ死んでなんからないし」

「朝貴」

「心配掛けてごめん……ごめんね……」

「もういい」

「うん」

ね、夕貴。夕貴は、いる？一緒にいて安心できる人。血のつなが

りはないけど、でも一緒にいたいと思える人。

学校に付くまで、『朝貴』は無言のままだった。車から降りて、寮へと続く道を行く間もずっとうつむいて黙っていた。清桜に少し付き合つてと言われ、学校の敷地内にある和風庭園に向かった。その中央にある小さな池には月が写り、錦鯉が優雅に泳いでいる。『朝貴』はぼんやりとその月を眺めていた。そして、固く閉ざしていた口をようやく開いた。

「僕は『朝貴』じゃありません」

「……」

「僕がここに来たのは、僕の戸籍上の母にある人の身代わりとして此処に入学しました。本当の『北條朝貴』の身代わりとして、です。

……驚かないんですね……」

「そう見える？」

「はい……」

「まあ、うすうす感じてたからね。朝貴じゃないって」

「……どこから話せばいいですか」

「2年前から、かな」

「わかりました……。2年前。僕は中学2年生でした。中学生の頃の僕は、まだ体が弱くて、学校を休みがちだったんです」

その日も、僕は学校を休んでいた。とても体の調子が悪いというわけではなかったが、朝から出ていた微熱や吐き気が治まらなかったのだ。時刻はちょうど午後5時を過ぎたくらいで、もうすぐ朝貴が返ってくるだろうと思い、僕は起き上がって本を読んでいた。すると聞こえてきた僕の部屋に近づいてくる足音。朝貴が帰ってきた。

僕はそう思った。そしてふすまが開いたその時、その考えは間違っていたと気付く。包丁を持った女が立っていた。瞬間僕は察した。ああ、殺しに来たのだと。この人は僕を少なからず良くは思っていなかった。

僕らは異母兄弟だ。朝貴を産んだ人は今家にいるあの人。そして僕を産んだ人は僕を産んで死んじやったらしい。なんの偶然か、同じ日に生まれた。だからこの事情を知らない人は僕らを双子だと思うだろう。

「その女の人は、包丁を持ちながら、しっかり僕を見据えていました。そして『あなたなんか生まれてくる必要なかったの……あなた母親は最低よ……あの人の子はおの子だけでいい……あんたはいらない』そう言っ、僕にどんどん近付いてきました。僕はなぜか動けなかった……いえ、逃げるのをあきらめてました。生きてちゃいけないんだ。そう思ってたのかもしれませんが。朝貴が僕に『にげろ』……そう言ってくれなければ、正気に戻らなかった。でも、そのせいで朝貴はあの人に刺されました」

「ッ……」

「全部僕のせいだ。そう思っただけです。その時。そのあと、僕も意識を失って倒れ、朝貴とともに病院に搬送されました。朝貴は何とか手術をして一命を取り留めました。意識が戻らず、今まで眠ってました。そしてぼくは1カ月ほど高熱を出し、入院しました。そして退院後、僕は自分の部屋に閉じこもり、一切誰とも会うことなく、1年半という月日を過ごしました。そして今年、僕は朝貴としてこの学園に入学した。それが、この2年間に起きた出来事です」

「そう……」

清桜はただそれだけ言うと、それきり黙ってしまった。真つすぐ、池に映る月を見つめながら、その顔はどこか思い詰めたような表情

だった。そんな清桜の様子に、『朝貴』はただ隣に立っていることしか出来なかった。

* 3 4 * (後書き)

なんかあれですね。

龍弥が朝貴って呼んでるのが
違和感あるのは私だけでしょうか
夕貴に対してはお前とかだったのに
朝貴にだけああいう態度……

そんだけ大事か!!

すみません……

ようやく夕貴の過去とか明かせて、少し
ホッとしています。

あの人怖いね

包丁持ってこられたらもう逃げようとも思えないだろうね。

龍弥と朝貴はもとから？昔からくつついてました。ただそれだけ。

訪れた沈黙は長く、夕貴は次第に居心地の悪さを感じていた。すべてを明かした今、もうここにはいられないのだ。本来、朝貴だった。朝貴が目覚めたのだから、夕貴が此処に通う必要はもうない。もう、此処にいる理由すらない。

夕貴はそのまま立ち去ろうとした。しかし、行動する前に清桜が夕貴の腕を掴んだ。

「どこ、行く気？」

「どこって……家に帰るんです。朝貴が起きた今、もう僕がここにいる必要はないですし……。朝貴、まだ通えないかも知れませんか。でも……たぶん僕がここに通うことは、あの人がゆるさないでしょうから」

「……夕貴はそれでいいわけ？」

「今更、嫌とも思いません」

「……じゃ、俺がヤダ」

「会長……」

「2年も夕貴のこと放って置いた俺が、こんなこといえないかもしれないけどさ。でも、せつかく一緒に居られるんだったらさ、俺は今のままが良い」

「……」

「あの2年は戻らないけど、俺の過ちが許されるわけないけど、でも……。こうして触れられるほど近くに、隣に夕貴がいる。今のままでいたい」

「でも……」

「安心して、夕貴がここ通いたいならなんとかできるから。だから何の心配もないよ。だからさ、夕貴はもう、誰かの指図で動くことない。自分のやりたいようにやっていいんだよ」

やりたいようにやる。今までそんなことできなかったのは事実。いつもあの人のいいなりになるばかりで、いつの間にか自分がやりたいこととか、夢とか、そんなこと考えないようになっていた。だから、今そう言われても、すぐにやりたいことなんて思いつかない。今僕はどうしたいんだろう。何ですぐに答えが出てこないんだろう。僕はここからいなくなりたいのか……。違う。じゃあ、此処にいたい？そう。でも……。うん、もう僕は周りを気にすることないのかもしれない。誰にも縛られず、自分がやりたい子尾をかなえてもいいのかな。

「……たい……。此処にいたいです。いていいなら、みんながいて、僕のこと認めて受け入れてくれる人たちがいる……。此処に……。この学校にいたい……」

「うん、なら帰るのは家じゃなくて寮だね。まだ朝貴がどうするかわかんないけど、ちゃんと夕貴は此処の学生だから。あとは俺に任せて」

「なんで……。何で僕にそんなことまでして……」

「ちっさい頃にね約束したんだよ」

「約……。束？」

「さ、寮に帰ろうか。そろそろ時間だし。夕貴まだ本調子じゃないでしょ？お酒飲んじゃって」

「う……。はい」

なんかはぐらかされた感じがするけど、でも此処にいられるんだよね。此処にいていいんだよね。そう思えただけで、なんか心が軽くなった気がする。でも、一つ引つ掛かることがある。

僕と会長は小さい頃……。昔から知り合いだったみたいなのに、なんで僕はそれに覚えがないんだろう。ただ……。誰か顔がわからない誰かと指切りをした覚えがあるんだ。あの人は誰なんだろう。そう

いえば、祭りの時とか、フランスに行ったときも誰かの姿がちらついていた……。凄く大切な思い出が僕の中からこぼれ落ちてしまっている。

あれ、待てよ。もしかして……

「会長……それ違うんじゃないんですか」
「え？」

「会長が昔約束したのは……僕じゃなくて、朝貴なんじゃないですか？僕ら瓜二つだから、会長勘違いしてるとか……」

「間違えないよ……夕貴の事だけは。何があっても、どこにいても、何年経つても……間違えない」

「でも、じゃあなんで……だって、会長……朝貴の事が……好き……なんですよね？」

「……は？」

「だっ……だってずっと、僕に『朝貴は俺の』とか言ってたし……。だから、僕が朝貴のふりしてるのを利用して、朝貴に言えないからって僕にそういつて……」

「俺、一度も朝貴が好きとは言っていないでしょ？」

「？でも、俺のつてそういう意味も含んだ言葉じゃ……」

「まあ、そうとも取れるけど。でもそういつた時って少なからず誰か居たでしょ？いきなり俺がそこで、夕貴なんて言ったらいろいろややこしいじゃん。だから、ね」

「……」

「俺が初めてこの学園で夕貴に言ったことが、ほんとの俺の気持ちだから」

「はじめて……？それって、あの入学式の日……」

入学式の日、僕は会長に呼び出されて、生徒会室に行った。そこで僕は突然会計に任命された。もちろん、何故？と理由を知りたくなかった。だから聞いた。そしたら会長はこんなことを言ってそれに

答えたんだっただけ……。

『君のことが好きだから』

確かに、朝貴とも言っていない。けど、そういう会長の目はしっかりと僕を見つめてた。

*** 3 5 * (後書き)**

清桜ずるいですね。

ずるがしこい男なんですかね。

うまく翻弄されちゃってる夕貴ですね。

もう少し……もう少しってところまで来た気がします。
書きたい終わりのところまで何とか頑張ろう。

あときはただ、何が何だか分からなかった。学校に通うというのは、それこそ初めて見たいなもの、周りは知らない人ばかり。人見知りというわけではないけど、これからどうすればいいのか暗中模索していた。右も左もわからないまま、僕はいつの間にか会計になってた。そう、その時言われた、会長の言葉を忘れたまま。ううん、受け入れてはいけないんだと思いながら、今まで過ごしてきた。

今まで僕は、自分のことを周りより必ず下だと位置づけていた。誰から必要とされず、受け入れられず。僕は一人ぼっちでこれからにいるんだと。少ないけどできた友達さえ、それは僕の友達じゃない。だって、みんな本当の僕を見てはいないんだから。そう思っていた。

そしてそれは会長にも当てはまるんだと思っていた。会長も、夕貴ではなく朝貴を見てるんだ。そう思って、青葉先輩とか、榊原先輩みたいに呼ぶことをしなかった。できなかった。今思えば、それがなんでだったのか、理由を見つけることはできない。なんでだったんだろうか。心の奥底で、この人が優しいのは朝貴だと思ってるからだとか、朝貴じゃなく夕貴だと知られたらきつとこの人の中からも僕はいなくなってしまうと思っただけだろうか。怖かったんだ。そうやってまた一人、また一人と誰かから存在していないと思われるのが怖かった。

それなのに、会長は最初から僕を見ていたんだ。朝貴以外で、河合さん以外で僕を見てくれる人がいる。家族じゃないのに、なのに僕を知っていてくれた。僕に気付いてくれていた。僕を好いてくれていた。

「あのときも本当は、君なんて他人行儀ないかたしはたくなかった。でも、あの場には良介も淳もいたから、言えなかった。今思えば、3年前に決めたことは間違っていたのかもしれない」

「決めたこと？」

「今となつちやすつごく笑えるけどさ、俺が夕貴のそばを離れたのは此処に入るためだったんだよね」

「黎暁学園にですか？」

「俺さ、医者になりたかったんだ。で、大学にも行くけど、此処の理事長がそっちの道目指してたこともあって、俺の将来的にはいろいろ役立つて親がね。知り合いみたいだし。だからまず、此処に入る必要があったんだ。そのために、俺は北條家に関わることを禁じられた。その間にあんなことがあったなんて、後悔ばかり。親の言うことなんか聞くんじゃないよ。だめだね。めったにしないことはするもんじゃないよ」

「医者になりたかったって……もう、目指してないんですか？」

「んー、どうしようかなってね。俺が医者を目指す理由無くなっちゃったし、こんな時期だけ進路変更しなきゃダメかなあなんてね」

「理由って……なんですか？」

「夕貴」

「僕？」

「体弱かったじゃん？昔から、何とかしてあげたいなって思ってた。夕貴いつも笑ってたけど、でもやっぱ学校行きたいだろうし、遊んでたかっただろうなってさ。俺が見るといつつも本読んでたからさ。体が弱いのはどうしようもないかもしれないけど、でも少しでも何かしてあげられるなら、してあげたかったからさ。でも、もう元気にこうして学校通えてるならいいかなって。まだ運動は無理そうだけどさ」

僕のために、自分の将来を考えるなんて。何でそんなことまでできるんだろ。好きな人のためになら、自分の将来をつぎ込んでも

いいんだろうか。そんな風に決められるこの人がうらやましい。

「将来の夢……」

「そういえば、俺夕貴の将来の夢知らないな。ね、何？」

「僕の将来の夢……？」

なんだっけ。あれ、なにかあったっけ。もともとなかったのかな。だめだ、そのあたりから思い出せないや。でも、なんだろう、何かあった気がする。なんだっけ……。

『僕ね、いつか——になりたいんだ』

今の声は……朝貴？ううん、ちがう。僕って言ってたからこれは僕？そうだ、思い出した……。そうだあの時僕は確かに夢を話したんだ。朝貴に。誰にも言わないでって言って。そう、実現できるかわからなかったから、秘密にしてって言って。そうだ、それで言わなかったんだ。

「夕貴？どうかした？具合でも悪い？」

「僕……ね、いつか小説家になりたいんだ……清ちゃん……」

「ゆ……！？」

そう言ったあと、僕は意識を手放した。それから目覚めるまでの間、僕はとても素敵な夢を見たんだ。忘れてた日々の記憶。それがどんどん思い起こされる。そしてそこには確かに、今とは髪の毛の色が違う、けどまぎれもない会長の姿もあった。あのとき、手を差し伸べてくれたのも、僕をおんぶしてくれてたのも全部。全部会長……ううん、清ちゃんだったんだね。

* 36 * (後書き)

補足情報

清桜はまず親が嫌いですね。

自分の家が大つきらいなのです。なのでいろいろ反抗心あったりします。

その一つがああ髪の毛。紫に染めたのが実は反抗心の表れとかなんか子供っぽいことしてます。もとは黒いです。でも、いまさらなげに紫なんだと突っ込みたくなりますね。金でも赤でもよかったらうに。紫なんてどつかのおばちゃんじゃないか。まあ、金とか赤はありきたりだからあえて避けたのかもしれませんが……

夕貴が小説家を目指したいと思ったのは小学生の時です。

そのころはまだ体がよわつちかったときなので、毎日日本ばかり読んでたんですね。

それで、いつか自分もこんな作品書けたらなっていう、あこがれからですね。

次回で真実編は最後。

その次からはいよいよ……

また変わらぬ朝がきた。あのあと、僕は三日ほど熱を出したらしい。久々だったせいも長引き、あれ以上長引いていたら、おそらく病院へ行くことになったんじゃないかと思う。だけど、何とか下がり僕は今朝の自分の部屋でゆっくり朝ご飯を食べていた。

その間、僕は失っていたらしい過去の記憶を取り戻した。今思えば、なぜ忘れてしまったのかは分からない。けど、こうして思い出してみて僕は一人じゃないことを改めて知った。戸惑ってはいなくて、どちらかというとすごく晴れ晴れしている。砂糖とミルクたっぷりのコーヒーを飲みほし、洗面所の鏡の前で服装の乱れがないか確認する。そして玄関で靴をはいて、かばんを持って外に出る。今日は月に一度の全体朝礼だ。またグラウンドで朝から準備をしなければならぬ。かちつと、エレベーターの下へ行くボタンを押してくるのを待つ。その間に青葉先輩が来るのもいつものこと。

「はよ！やっぱ今日もお前が一番か！」

「いったいい……おはようございます、青葉先輩。この日だけはいつより早いんですよね」

「失礼なやつだなあ？ちゃんと起きてんだからいいだろ？」

「どうせ、静香に起こしてもらったのでしょう？電話で「げっ」

「なんだそうだったんですか。あ、榊原先輩おはようございます」

「おはようございます。あればなんですよ」

「うぐぐ……」

「静香先輩のモーニングコールですか」

「いーね、淳はさ。俺もモーニングコールしてもらおっかなあ」

「会長の場合は、コール音に気付かず寝てるんですよ」

「そんなことないよ」

そして一番最後に会長が姿を現すのも、いつも通りだ。でも、この前から僕には違ってきている。記憶とともに、思い出したのは昔から抱いていたこの人への想い。僕はどうやら会長のことが、好きだったようだ。それは今抱いているものと同じで、僕は記憶を失っていたのにまたこの人のことが好きになっていたんだ。でも、まだそれを伝えることはできないでいる。普通に話すのには何の変わりもしないのに、その思いを告げることだけはなぜか、簡単にはできそうにもなかった。実は今日までに何回も告白しようとは思ったこともあったのに、結局その場面になると、恥ずかしくて緊張して言葉がでなくなってしまうた。いつか言えたらいい。そう思う。今まで何度も僕は会長に告白されてきていた。この想いを思い出すまでは、何気なくかわってきていたけど、今はとてもうれしく思う。その時に返事を返してしまえばいいのかもしれない。けれど、今度は僕から告白したいっていう思いがあつて。だからそれができるまでは、片思い同士でいてください。いつか必ず、言ってみせます。『ずっと好きでした』って。

*** 37 * (後書き)**

これで、ようやくBLになったんですかね。

私のは本当に恋愛要素が薄くて薄くて……

なのでこれから、まじめに恋愛小説になるよう頑張ります。

目指すは夕貴の告白です。

恋愛、恋と愛の話。

がんばろ……

文化祭から三ヶ月後。年明けを迎えた最初の登校日。つまり始業式の日、夕貴は鏡の前で自分の顔とにらめっこをしていた。黒く染めていた髪の毛は、地毛の薄茶色に戻し、カラーコンタクトをはずして青い瞳の姿だ。つまり北條夕貴の姿に戻ったのである。その後から、黒髪黒眼がひょっこり顔を出す。

「ほら！やっぱ夕貴はその格好が一番だって」

「かなあ……。朝貴も制服似合ってるね。やっぱ朝貴は何を着ても似合うからいいな」

「なーにいつてんだよ。俺が似合うなら夕貴だって似合ってるに決まってるじゃん。やっと、夕貴と一緒に学校行ける」

「うん」

朝貴は、驚きの回復を遂げ、立って歩け、さらには走り回れるほどにまでになっていた。医師も驚いていたほどの回復なのだ。もともと運動神経は抜群だったからかもしれないのだが、ほとんどは朝貴自身の努力の成果だろう。この学期から編入することが決まり、空き部屋がなかったため、もとの朝貴として使っていた寮の部屋を朝貴と夕貴の二人で使っている。同じベットで寝ているが、全く抵抗もない。まあ、当たり前といえば当たり前だし、兄弟だし、仲の良さの表れともいえる。

「なんかドキドキする……。大丈夫かな。みんな理解してくれるかな

……」

「大丈夫だって。清桜がうまくやるって言ってたんだろ？」

「うん、俺が説明するから大丈夫——って言ってたから」

「なら大丈夫だよ。夕貴は何も心配してなくていいんだ！んじゃ、そろそろ行くか」

「うん」

僕らはそろって、まずは生徒会室に向かった。僕らのことを知ってるのは今の時点では清ちゃんだけ。だから榊原先輩とか青葉先輩。漣先輩に静香先輩には最初に話そうって、清ちゃんと話していた。生徒会室に付くと、その部屋の前で清ちゃんが待っていた。

「おはようございます、会長」

「あーまた会長とか言う。おはよう夕貴。それに朝貴も」

「俺はついでかよー!!」

「そんなことないけどね。やっぱ、夕貴はその姿じゃないとね」

「だろだろー!」

「そ……かな」

そして、僕らはそろって生徒会室に入った。中には四人が待っていた。僕と朝貴を見た瞬間少なからず四人は驚いて目を丸くしていた。でも、会長……清ちゃんがいつまんで僕らのことを説明したら、なんか納得してくれたみたいだった。いいのかな、そんなにあつさりと。つさりと。

「へえ、夕貴君ってハーフだったんだ」

「はい、母はドイツ人だったみたいです。あの……なんでそんなにあつさりとなつとくというか、受け入れてくれたんですか」

「朝貴は朝貴。夕貴は夕貴。どっちも好き」

「え？」

朝貴と夕貴の間に入り込んだ漣が二人の腕を握りそう言った。驚く夕貴は周りを見回す。ほかの三人も同じ意見のようだった。その

後、始業式で清桜は夕貴が今まで家庭の事情（あまり深くは話さず、飽くまで家庭の書事情とだけ伝えた）で朝貴として通っていたこと、その事情が解決したのでこれからは夕貴としてこの学園で生活すること。そして新しく北條朝貴は転入生としてこの学園に加わると説明した。ここでも、特に反対する声は聞こえず、それどころか人気の高い夕貴がいなくならずに済んで喜んでいようでもあった。もちろん、瓜二つの朝貴も歓迎されている。

僕、今すごく幸せだな。だって、みんなが僕が存在を認めてくれる。それがすごくうれしい。今まで、僕なんか生きてたってっと思っただけど、此処にいられて良かったって思う。

こみあげてくる涙を必死でこらえる。それでもあふれ出てきそうな涙が、夕貴の大きな瞳の端にたまる。潤む視界、それでも夕貴は心から笑っていた。

*** 38 * (後書き)**

2年も寝てたやつが3カ月で復活できるわけがない。

事はもう、私も思ってたが……

このままじゃ時間的におかしくなるので、驚異的な復活を遂げさせました。

本当にすみません。

もう文化祭なんかやるから……

でもやりたかったので仕方ないです。

ではこれから頑張って恋愛小説になるように頑張ります！

年も明け、再び変わらぬ学校生活が始まってから数日が経った。

まだ冬休みの余韻から覚めないのか、学校内はどこかゆつくりと時間が流れているようにも思えて来る。夕貴は朝貴とともに図書室にいた。いくら身体が驚異的な回復を遂げても、頭の中身はそうは行かないのだ。入院していた2年もの間の勉強はちんぷんかんぷんだった朝貴は、夕貴に特別授業をしてもらっている。

「でね、 $x \parallel 25$ になってそれで……」

「むむ……なんで25？」

「なんでって……ここどこかけてさらにここにこれを代入して……」

「……」

「そか、こっちがこうなって……よし、あとは自分でできる……!」

「そう。じゃ、またわかんないとこあったら……」

「いんすーぶんかいってなんだ？」

「……」

朝貴、物覚え悪いんだよね。一度身につけば忘れないのに。それまでがほんつとに大変なんだ

「なーなー、数学どこまでやればいい？」

「そのページで今日は最後」

そう夕貴が言った。その言葉に朝貴は、じゃああと3問だなっとなつと嬉しそうに笑顔を見せる。甘いよ、朝貴。数学は終わりだけどまだ国語があるからね。古典の基礎くらい覚えてね。

静かな図書室の中には、夕貴達以外にも生徒の数はある。受験シ

ーズンのせいかな、朝貴の様にひたすらペンを動かす姿が多い。

「そーいえばさ」

「なに？」

「夕貴は清桜に冬休み会った？」

「会ってないよ。でも、なんで？」

「んー、べつに。ならいいや」

「何？気になるよ」

「ねえねえ、此処の答えの方が気になるんだけど」

「つて、そこさつきと同じだよ！？ひつくしゅ……」

「あれれ？夕貴風邪？」

「わかんないけど……最近さらに冷え込んでくるからそれでも……」

「お薬あるの？」

「最近調子良かったからないけど……平気だよ多分。あつたかくして寝れば平気……」

「じゃないよねいつも」

幼少のころから繰り返されてきたやり取りだったためか、朝貴にはすぐにわかってしまう。いつも大丈夫しか言わない夕貴だが、そういうときは必ず体調を崩すか、悪化させるかのどちらかになる

「だ、大丈夫だよ。それに……今週末は出かけたいし……だから絶対風邪ひかないから」

「出かけるの？ひとりで？」

「ううん、清ちゃんと一緒だけど」

「デート？」

「ちっ……違うよ！！僕がほしいものあって、それで買い物行きたいなって思ったんだけど。僕土地勘ないから、一人じゃいけないなって思っ。最初は朝貴を誘おうって思ってたんだよ？でも……」

「あはは！今週末は、俺検査だっけ」

「だから無理じゃん。で、静香先輩とかも考えたんだけど、何か気が引けるって言うか。なんか最近静香先輩元気ないし、零先輩もどこか変だから……。だから清ちゃんに頼んでみたらいいよって言うてくれたんだ。ただそれだけだよ」

「なーんだつまんない！」

「つまんなくないよ。つくしゅー！うー、朝貴ごめん、今日はこれでおしまいにしよう？」

「ほんとに大丈夫？ホットミルク作ってやるな！」

「ありがとう」

僕は朝貴とともに寮に戻った。

*** 3 9 * (後書き)**

お気づきの方もいると思いますが此処で宣伝↑

本作とリンクした『和も洋も甘いもの』連載中です。

このお話にもちよくちよく出てきてる静香先輩と淳のお話です。
近日良介と澪のお話も問う公開してきたらいいなと思ってます。

(タイトル未定ですのでそれが決まり次第ですが……)

本作を一応優先で、ほか2作品はぼちぼち更新していきます。
とかいいつつ、本作があまり進んではいないんですが。
がんばります。

清ちゃんと出かける日の朝。とても珍しい人から電話が来た。

「もしもし、おはようございます」

『夕貴おはよ！！そしてごめん！！』

電話の相手はその清ちゃんからだった。こんな朝早くに起きてるのも珍しいし、電話してくるのも珍しい。しかもなんか凄く慌てる。何かあったんだろうか。

「どうかしたんですか？」

『なんか急に俺の父さん海外から帰ってきてさ。休日だから顔見せろって五月蠅くて……。だから行かなきゃいけなくなっただんだよ！ひどくない！？』

「そうなんですか……。でもそれじゃあ仕方がないですよ。出かけるのはあきらめます。また違う日に誰か誘っていきますから。僕のことには気にしないでください」

「えー。そこはやだっ！とか言つてよお。俺悲しい。ね、午後からならいけると思うんだ。それじゃダメかな」

「僕は別に午前でも午後でも構いませんよ。それに今日は久しぶりに病院行こうって思ってたので、午後からのほうがいいですね」

「……病院？なに、夕貴どこが悪いの？寝てた方がよくない？」

「え、いやそこまで悪くないですよ。ちょっと咳出るんで、早めに薬もらっておこうって思った……朝貴に行ってきたよって言われただけです」

「なんだ、ならいいけど。じゃ、午後3時くらいに駅前でもいい？」

「はい」

「じゃ行ってくるよお……」
「がんばってください」

パタンと携帯を閉じて、そばのテーブルに置く。時計の針はもうすぐ9時になるうとしている。まだ朝貴は寝室で寝ている。彼のための朝食はテーブルの上にラップをして用意してある。

「ちょっと早いけど、出かけようかな。職員室に外出届出して、それから出発だね」

医者は行きつけのため、駅につけばあとは迷うことなくいける。もともと方向音痴ではないし、学園の近くにバス停があったの思い出した。そこから駅に行き電車に乗って病院に行こうと考えた。今はそのバス停でバスを待っているのだ。あと数分で来るらしい。

「夕貴、おはよう」
「うわっ!？」

後ろからいきなり抱きつかれた。驚いてあわてて振り向くとそこには、私服姿の澪先輩がいた。

「れ、澪先輩!？おはようございます」
「夕貴はおでかけ？」
「そうです。澪先輩もですか？」
「うん、まあね。じゃ、僕そろそろ時間だから」

そう言つて、走り去ってしまった澪先輩。だけど、どこか逃げるようだった気もするのは気のせいだろうか。そう思っていたところにバスが来たので、僕はそれに乗りこんだ。バスに揺られ、僕は駅へと向かう。バスの中は程よく暖房が利いていて、1月の寒

意外よりも快適なのは間違いなかった。いくらニット帽と、マフラーと手袋で防寒対策ばっちりだとしても、やっぱり寒いのは防ぎようがない。しかも今日は曇り空で雨か雪が降り出しそうだ。このまま曇りであることを祈ります。

駅で降りた僕は、改札で切符を買って、病院がある駅に向かう。朝貴が入院していた病院は私立の総合病院だけど、僕の行きつけは個人経営の病院。僕は此処のおじいさんの先生が大好きだ。予防注射は痛いからいやだけど、それ以外は優しくいろいろ相談にも乗ってくれるいい医者さんだ。清ちゃんもそうなるといいな。病院の窓口で診察券を出して、僕は待合室で順番が来るのを待つ。休日だからだろうか、結構ほかにも患者さんがいた。時間に間に合うかな……。

で……。

案の定、結構時間がたってしまった。只今2時半を過ぎたところである。あのおじいさん先生は、腕はいいけど、結構のんびり屋さんだからこんな風に待たされるのはいつものことなんだけど……。今日はちょっとヤバい気がするよ！！僕これ以上に走れないこと恨んだことないなあ！！間に合いますように！！

「間に……あつた」

3時3分前。何ともぎりぎりで間にあつた。もはや奇跡だろ。あわててあたりを見回す。だがそこに、清桜の姿はない。くまなく駅前を探し回る。それでも見つからない。薬の入ったショルダーバックをギュツと抱えて、息を整える。まだ3時にはなっていない。夕貴は駅前の何かの像の台座に寄りかかって清桜を待つことにした。もともと自分の用事。だから、清桜が遅れても文句はないし、むしろ急がせても悪い気がする。ずるずると体をずりおろし、その場にしゃがむ。行き交う人。客を待つタクシー。地面をつつく鳩。冷たい風がほおをなでるたび、夕貴の体は震えあがる。やっぱり、遅れ

てきたら喫茶店であつたかいココアでもおごつてもらおうかと思ひ始めた。

黒い黒い曇天の空から。真つ白な雪が降つてきた。ひざの上にかばんを載せ、その膝を抱えてしゃがんでいた夕貴のニット帽にそれが降り積もる。肩に、背中に、それは徐々に積もり始めていた。夕貴はそれを払おうともせず、ただ地面のオレンジ色のタイルを見つめていた。駅の建物にある時計は午後5時45分になろうとしていた。

* 40 * (後書き)

寒い中あんな風に私は待てません。1分でも過ぎたら多分帰るな。
↑
だって寒い嫌なんでもん。私の住んでるところは雪降らないんですが、それでも寒いです。

しかし、漣先輩を何で出したのかわかりません ↑
しかも今の今まで漣先輩が檜山って名字なのを思い出せませんでした ↑
自分のキャラなんだし覚えとけよって感じですよ。

*** 4 1 * (前書き)**

無駄に長いです。いや、内容はあるので無駄じゃないことを祈つて
ますが。

あと今回は清桜視点で、場所も近衛家です。時間は3時前後（約束
の時間の前後）あたりです。

顔を見せる。まあ、つまりは家に帰って来いということだろう。

それくらい俺にわからないはずがない。なにせもう5年くらい実家には帰ってない。マンションに一人暮らしだ。寮がある学園、長期休暇以外は帰らないから、無駄な持ち物かもしれないが。俺はあの家が嫌いだった。許されるならあの子がいるあっちの家に住みたかった。でもそんなことをあのうるさい親が許すはずもなく仕方なくマンション暮らしを選択した。社会勉強のためだともっともらしいことを言っただ。むろん、俺はそこそ一般常識なるものは知ってるし、自分ひとりで暮らすことなど訳もないのだから一人暮らしで得るものなどないのだが。それほどあの家にはいたくないのだ。

でも、俺はそんな両親には逆らえないでいる。すべては俺の大切な人のせいだ。もちろん彼が悪いとかじゃない。俺がただ一途に思ってるだけ。ずっとそばにいたかった。だけど彼の生い立ちは俺の親にとっては受け入れがたいものらしく、俺は彼との接触を断たれそうになった。でもそんなの嫌に決まってる。だから、俺の進路を親に一存する代わりに、彼に会うことを許された。今時そんなことする親がいるなんて、信じたくもないが実際俺の親がそうなんだ。あの学園に入ったのもすべて親の指図。それでも、彼に会えなくなるのは何事にも変えがたいものだ。でも、俺の進路は生半可なものじゃない。だから少なからず彼と離れないといけなかった。俺は今もあの時の選択を後悔している。

俺は今、実家にいる。休日に関海外から父親が帰ってきた。そしてなぜか顔を見せろという。こんな日に帰ってくるとは……嫌がらせに他ならない。せつかく今日は彼と一緒に出かけられる日なのに。ため息が出そうになるが、何とか押しとどめる。しかし、理解できないのは今の状況だ。当初の俺の考えでは、ただ親に顔を見せれば

帰れると思っていた。少し俺の将来その他云々の話をする、としても約束の時間には間に合うはずだった。それが、今現在午後3時半を少し回った。もうすでに30分過ぎてしまっている。いい加減に開放してほしいものだ。そして俺の目の前——といっても長机を挟んではいる——には父親、その隣には母親、そして両脇には親戚だろう人物が並んで座っている。そして入口に背を向けて俺が座っているわけで……。なんだよこれは。俺はさつさと夕貴のところにいきたいんだよ。こんなくそ爺と話すことは何もない。あと家は継がないと言っている。

「何をそんなに不機嫌なのだ、清桜」

「いえ、別に」

「そういえば、何やら北條家で動きがあったそうだな」

「そうですか」

「今年、ご子息が黎明学園に入学されたそうじゃないか」

「ええ、二人とも」

「……」

俺はあえて二人というところを強調した。此処にいる奴らは北條家には子どもは一人だけだと認識している。夕貴の存在は認められていない。いないことにされている。血がつながっていないから。ふざけんなよくそ爺。もともと夕貴の母親が本妻だったんだ。だが、あの人は体が弱くてすぐになくなった。その後あの女が本妻を名乗って婚約したんだ。だからほんとだったら夕貴が本妻の子どもだったんだ。それは朝貴も、俺も、表では強く言えないが、北條家当主で二人の父親も認めている。だがあの女のせいで、当主は強く出れないでいる。全く、あの人が一言認めてくれればいいのに。こいつらも、あの女に良いようにされているだけだ。悪女め。だから俺は女が嫌いなんだ。嫁もらうなら絶対に夕貴だね。

「なぜあの北條家をけがしている子供が黎明学園に入っているんだ？」

「穢してなどいません。彼も北條家ご子息です」

「戯言を。どうせあ奴の母親が御当主をそそのかしたのだろう？」

「ッ……」

そんなわけない。そんなことをしたのはむしろ……朝貴の母親だ。あの女は、夕貴たちの父親から違法な手を使って精子を手に入れて、病院で人工授精したんだろう。夕貴の母親の死後、あの女は自分を正妻として認めると、夕貴たちの父親を脅した。従わねば自分は強制的にはらまれたのだと世間に公表すると言って。あくどい女だと思う。魔女の生まれ変わりなんじゃないかとも思う。

「もう十分です……こんな話を聞かされるならおれはもう帰ります」

「お前、この家を継ぐ気にはなったか？」

「ありません。そんなこと毛頭も思いません。ほかに適任者がいるはずです」

「お前が一番の適任だ」

「俺はいやです。少なくとも、夕貴の存在を認めないお前なんかの会社その他を継ぐ気にはならない」

「どこまでお前はあの餓鬼に執着しているんだ」

「家族よりも、自分自身よりも、俺は夕貴を優先するただそれだけです」

そうやって俺はその空間から飛び出した。玄関先で、靴を履きつつ携帯で時間を確認する。すでに時刻は午後5時を過ぎていた。俺は玄関のドアを開けずに立ち止まった。もうこんな時間になってしまった。もう夕貴は帰っているだろう。こんな季節だ、そうするに決まっている。

「でも……」

もし……まだ待っていたら？そんな考えが浮かんできて、俺は玄関から外へ出た。白い雪が空から降ってきていた。雪まで降っているとすればやっぱり帰ってるだろう。そう思うが、謝罪のため彼に電話をかける。コール音が続く。一向に出てこない。しばらくして出たが、それは夕貴ではなく電子的な声だった。

『この電話は電源が入っていないか、電波が届かないところにあるため繋がりません』

「夕貴……？……」

このまま帰るか。いや、でももしまだあそこにいるとしたら……。俺は雪の降る中、駅へと駆けだした。

* 4 1 * (後書き)

夕貴は父親と母親をちょうどミックスしたって感じの性格。お父さん、押し弱すぎ。尻に敷かれすぎだし。もうちょっと頑張ろうよって感じ。

清桜は別に朝貴のことが嫌いとかじゃないです。ただあの女(朝貴母)が嫌いなだけです。親が最低なだけで子どもは悪くないって考えです。

この話、親と子供うまくいってなさすぎですねえ。

*** 4 2 *
(前書き)**

再び視点を夕貴に戻していきます。

あれからどれほど経ったかなど、夕貴は確かめようとしなかった。あれからずっと、彼はしゃがんだままオレンジ色のタイルをただ見つめていた。うつろな青い目に、オレンジ色が徐々に白く染まっっていくのをただ写していた。あたりはすでに暗く、貴宅に急ぐ人や、これから恋人とのひと時を過ぎに行く人など、さまざまな人どおり。その中にいる夕貴だが、静かにしゃがんでいて誰も気にも留めない。手袋に包まれているのに指先はジンジンとしびれ、体の芯まで冷え切っている。このままでは本格的に風邪をひくだろうが、すでにその少年の頭にそんなことは浮かんではない。

なんで来ないんだろう。もしかして僕との約束忘れて帰っちゃったのかな。それとも来る途中で何かあって……。どうしよう、連絡した方がいいかな。でも、もしまだお家でお話してるなら迷惑かな。そもそも僕の携帯、電池切れちゃったからかけれないし……。やっぱり僕は忘れられちゃったんだ。そうだね。だってまだお話してるわけないもんね。そっか、清ちゃんからも忘れられちゃうんだ僕は。ならもうここから動かなくていいや。此处で凍え死んじやっても別に誰にも気づかれないうね。それはそれでさびしいけど……。

清ちゃんだけは違うつてどこかで思ってたのに。それは僕だけだったのかな。ずっとずっと、僕が小さいころから一緒にいてくれた清ちゃんだから、今回も絶対に来るんだって思ってたのに……。どうして？ やっぱ僕だめなのかな。お母さんが本妻じゃないから？ あの人から生まれてきたら、みんなに認められたのかな。そしたら、僕も丈夫で、朝貴と一緒に小学校にも行けて……。朝貴がさされることもなかったのかな。なんだ、やっぱ僕じゃないじゃん。僕がいるからみんな不幸になってるんじゃない。なら僕、お母さんのところ行ってもいいかな。

そんなことをどれほど繰り返していたことだろうか。オレンジ色がもう見えなくなったところに新しい色が見えた。黒。それがオレンジを隠してた雪を踏みしめて止まった。僕の目の前で。それでも僕は、なぜか顔をあげなかった。もう動きたくもなかったのかな。そしたらその黒いのがいったん引いて、次の瞬間、何にも見えなくなった。体全体に重くのしかかってくる。けど、つぶされないのは僕に全体重をかけてないからだろう。前に引つ張られる感覚がして、モスグリーンが視界いっぱいに広がる。黒いファーマ見える。そして聞こえるのは上がって何度も吐かれている荒い息の音。痛いほど抱き寄せてるこの人は誰？なんて思ってたら急に体を離されて、そしてうつむいてた僕の顔をその人は力いっぱい両手で頬を挟んで無理やり上を向かせた。視界に移り込んだ、薄紫色。その人の顔はすっごく複雑な顔だった。怒ってる？悔んでる？どっち？

「馬鹿夕貴！！なにしてんの！？今何時だと思って……っ……俺なんか待ってないでさっさと帰ればよかったのに！！体弱い自覚あるの！！雪だつて降ってる、いくらコートとマフラーで防寒してるからって、まだ1月なんだよ！！少しは自分を大切にしながら何度言ってる……！！」

その人——清ちゃんは僕の顔を見て言葉を切った。ごめんなさい、でもね止まんないんだ。どうしたらいいのかな。でも、止めたくないな。冷たい手してるね。必死になつて走ってきてくれたんだね。ちゃんと此処まで来てくれた。僕を見つけてくれた。

「よかった……」

「え……夕貴！！」

僕はそこで意識を手放した。清ちゃんにもたれかかるように、ただしっかりと清ちゃんにしがみついたままで。

* 4 2 * (後書き)

清桜も怒るときは怒ります。

けどもう少し口調がきつくならないんですね。

夕貴に電話がつかなくなかったのはただの電池切れでした。

私もよく一本しかないまま出かけてうわってなります。

今日あと何話が更新できればしたいです。

あと、クリスマスの番外編でSSも載せたいと思います

あとあとっ！登場人物紹介も何とか……

出来なかったらごめんなさい！！

番外編は短編として載せます。でも内容がちょっとあれなので

エロ……っばく、でもそうじゃないような……

いちやこらしますので注意です。

夕貴も清桜も静香も淳も漣も良介も出ます。というかこの6人しか
出ません。

あ、でも朝貴と龍弥も出したい……。どないしょ。

うーん、まあ、番外編だしいつか！↑↑

全く本編に関係ありませんって注意書き書けば……大丈夫なはず。
頑張って今日中にアップします！！

では！

*** 4 3 * (前書き)**

話の都合で清桜視点です。

書きたいようにうまくかけずに若干挫折してる部分はあります。

まだ恋人じゃないんだもんなあ。

早くくっついて欲しいです。

冷たい体から力が抜けていくのを、しっかりと感じ取れた。それで俺は恐ろしくなった。あわてて自分の腕の中にいる夕貴に視線を落とす。最悪の状況なんかが頭をよぎったが、夕貴はかすかに寝息を立てているようだった。わずかに安堵の息を吐いたけど、まだ安心するには早い。このままじゃ低体温症だ。どこかであつたかくしてないと、それこそ最悪の状況になりかねない。さて、どうするか。寮に戻るにも時間がかかり過ぎる。実家に夕貴を連れこむわけにもいかない。北條家も此処からは少し遠い。ではどうするか……。

ふと視線を上げた先に一軒の建物。あそこは確か――。考えを巡らしている時間はない。夕貴を抱えあげ、俺はその建物へと向かった。

確かその建物は60階はあつただろう。きらびやかな装飾はそれでも派手すぎず気品を保っている。さすが高級ホテルをうたっているだけはある。ロビーに置かれたそれら装飾品を売れば数年は遊んで暮らせるだろう。少年を抱え足を踏み入れた俺を、従業員が不審がって見てくる。悪いけど、不審者じゃないからね。つか、そんな顔で見ると首切られるよ？俺に。

「すみません」

「いらっしやいませ、ようこそわがホテルに」

不審がりつつも、マニュアル通りの接客。うん、すつごく教育つけてたもんね、一度だけ父さんに連れられて此処着たから知ってるよ。

「ご予約のお名前をお伺いしても？」

「いや、予約はしてないんだけど部屋一個用意してもらってもいい？そんな高くなくていいし、場所も問わないから」

「失礼ですが……ご予約がないと……」

「料金は家に請求してくれて構わないし、オーナーの息子が泊りに来たから金よこせって言うてくれれば伝わるよ」

「オーナーの御子息……っ……まさかあなたは」

「それでも伝わらなかったら、近衛清桜が予約もせず泊りに来たがお前はこういう教育してんだ。親だろこのくそじじいっていつて」

「そのようなこと！もうしわけありません、すぐにスイートをご用意させていただきますー！」

「そう？あー、あとでクリーニング頼むから取りに来てね。それと予約してなくてごめんね」

「いえ、とんでもない。御用が御有りでしたらなんでもいつでもお申し付けください。こちらがお部屋のカギとなっております！清桜様ならご予約なしで、いつでもお越しください」

「そ、ありがとう。じゃ、またあとで」

どれだけ、あの親が財力あるか今度ほんとに調べたくなった。趣味でこんなホテル経営してるほどだ。きっとほかにもこんなところがあるに違いない。もちろん、北條家にはおよばないけど。

「くしゅ……」

「つと、今はそれよりこっち優先。ほんとごめんね、寒くてさびしい思いさせて」

渡された部屋は結構いい部屋だ。まあ、それなりの部屋じゃないと俺暴れるよ？本気で家出るね。ああは言っただけさ、それなりの待遇はしてもらわないと。此処には北條の御子息もいると言ったらロイヤル位はくれたかもね。

夕貴を抱えながら、何とか鍵を差し込み部屋へと入る。掃除がしつかりとこなされたその部屋は、確かにスイートルーム。こたわりだけは人一倍のあの人のホテルだから家具もその他も完璧だ。くやしいな。クレームの一つでもさせてくれればいいのに。……だから今はそれよりも夕貴だつてば。夕貴をベットの布団の中に寝かせ、部屋の暖房を入れ、その間に浴室に行きバスタブに湯を張る。

「疲れ……た」

ベットに倒れ込む。そのあとよこにまだ寝てる夕貴が起きてしまつてないか確認してしまうのを自分でも馬鹿なんじゃないかと思いい頭を抱える。もう、親ばかみたいな感じなのが嫌だ。でも、仕方ない。それほど大事なのだから。温かい部屋、暖かい風呂に入つて部屋に入ったバスローブに身を包んだ彼の顔は血の気も通いいつもの彼だった。意識のない人間を風呂に入れるのは初めて……いや、はじめてではないが、それでも骨が折れる。自分も何度も意識を飛ばしたくなつたかわからない。だがまだやる必要がある。そう思い俺は、自分の携帯で良介に電話をかけた。

『もしもし?』

「良介、悪いんだけどさ。俺の代わりに外泊届け出してもらつてもいい? ちよつとわけあつて寮には帰れないんだわ。もう記入はさせて俺の部屋のドアに挟んであるからさ。あと、朝貴に夕貴は今日帰れないけど、俺と一緒にだから心配しなくていいよつて言つていて『わかりました。ゆつくりしてきてくださいな』

「わるいねー」

『とってもそう思つてるようには聞こえません。じゃ、今から出てくるのでこれで』

これでよし。万が一のことも考え、外泊届けを用意していた俺は偉い。これで無断外泊なんてこともなく、俺も夕貴も罰則なんか受けなくてもいいわけだ。罰則であの風紀委員長に説教されるとかやだしね。さて、俺も寝るか。ベット一個しかなくてごめんね。ああ、俺夕貴にごめんねしか言えなくなってるなあ。

* 4 3 * (後書き)

清桜の家は結構いろんな職業やってますね。

デパートやってたり、ホテル経営してたり、病院やってたり。

途中時間の経過して数時間後見たくなっていますが、

無理です。私には。意識ない夕貴を浴室に入れるために一人どぎまぎしちゃう西欧を書くなんて…… or z

なのでカットしました。まあ、清桜だからやましいことはしないんだけども。

ある意味神みたいな理性してんな清桜。

今年もよろしくお願いします。

暖かくて、やさしい感じがする。こんなの初めてかもしれない。ううん、前にこんな感じあったな。懐かしい、ずっとこのままでいたい。けど、なんだろう。何でこんなにあったかいのかな。こんな風に僕を包んでくれるのは、誰？

「ん……せ……ちゃん？」

目を開けて、すぐそこにあったのは清ちゃんの寝顔で。僕はしっかりと清ちゃんに抱きしめられたまま寝ていたようだった。って、ここどこ。なんかすごい豪華なお部屋なんだけど。どこかのホテル？え、でも何でホテルなんか……。

「そか、清ちゃんを待っててそれで……」

あ、あれ。僕、バスローブ着てる。もしかして……お風呂入れてくれた？う……うわあ。はずかしい。いや、清ちゃんだから何もしいってわかるけど、でもでも……あう。でも、清ちゃん来てくれただよね。あれ夢じゃない。夢じゃないから今こうして一緒のベットで寝てるんだよね。本当なんだよね。

「う……うう……ひっく……うえ……っく……ふっ」

やば、また涙でてきちゃったよ。でも、うれしかったら出ちゃうんだからしょうがないよね。しょうがないけど、泣いたら清ちゃん起こしちゃうから。我慢しなきゃ……。

「やっぱ無理い……ふええ……」

「ん……夕貴？え、ちょ夕貴どうかした！？俺なんかした？」

「ちが……うれしい……だけで……えつく……」

「うれしい？」

「来てくれたの……うれしかった……忘れられてないって思えてっ

……。清ちゃんから忘れられちゃったんだって思ってたからっ……」

「ごめんね、約束の時間に間に合わなくて」

「そんなの……良いんです……全然そんなの……いい……」

なおも泣きやまない僕をなだめるように、清ちゃんが僕の頭をやさしくなでてくれた。その手がすごく気持ちよくてまた睡魔に襲われる。けど、まだ寝たくない。まるで寝るのが嫌で必死に拒むように、僕は目の前にある清ちゃんの体にしがみついた。やだ、まだ寝たくない。まだ、まだ、まだ。

「夕貴？」

「昔もこうやっててくれたよね」

「うん、そうだよ」

「おんぶもしてくれたし、手もつないでくれたよね」

「うん」

「何で僕、忘れてたのかな」

「さあ……」

「でも、思い出せてよかった」

「そう」

「清ちゃん」

「ん？」

「僕……ね……」

「うん」

「僕……」

清ちゃんのこと、好きだよ。そう、言葉を発せられたかは分からない。正直僕はまだ、言おうとは思ってなかったのに。何でだろう。この場の雰囲気のせいなのか、僕の頭がぼんやりしてたのかはわからないけど。思わず出てしまった告白の言葉。僕はまた夢の中へと導かれてしまったから。ただ、頭をなでていた清ちゃんの手が止まっていたのは感じていた。清ちゃん、僕の想い届いた？

*** 4 4 * (後書き)**

自分で考えてるのに、何でこううまく著せないのかに苦しんでいます。
むりだ。俺に恋愛小説とか無理っ↑

いえ、なんでもありません。

次回もがんばって恋愛小説をかきます。

*** 4 5 * (前書き)**

この話に約一週間費やしてしまいました。

まだこの話を出すのは早いかもしれないのですがこれ以上延ばすのもどうかと悶々……。

しばらく更新遅くなるかもしれませんが。

それなのに、あっち更新しすぎてても怒らないでください。

あの日から一週間。僕は清ちゃんとは会ってない。この時期、清ちゃんは受験生だし、いろいろ大変らしかった。いくら寮の部屋が隣でも、押し掛けたり会いに行くのは迷惑になるかもしれないと、僕も会おうとはしてなかった。そんなとき僕は榊原先輩に生徒会室に呼ばれた。

「僕が……次期副会長ですか？」

「来年度からですけどね。会長の座は淳がやってくださるそうですから、あなたには副会長でどうでしょうと」

「そっか、榊原先輩も卒業ですもんね」

「まああと2ヶ月半ありますけどね。そろそろ考えないといけないでしょうし。……すぐに決めろというわけではありません。最低でも2月までには決めていただければいいですし、夕貴が断つても他をあたりますしね。ですから、自分がやりたいかやりたくないかを考えて結論を出していただければいいですからね」

「はい……」

そうか、もうそういう時期にもなるんだ。全然考えてもなかった。榊原先輩だけじゃない、清ちゃんも静香先輩も、あの風貴委員長もみんな、いなくなっちゃうんだ。一緒の学校にはいられないんだ。みんないなくなっちゃうわけじゃないけど、でも……。

「そういえば、榊原先輩は大学進学ですか？」

「ええ、のちには家を継ぐんですけどね」

「先輩のご実家ってなにされてるんですか？」

「話したことありませんでしたっけ？」

「はい」

「聞きたいですか？」

「え？」

「そんなに聞きたいですか？聞きたいですか？聞いて後悔しません？」

「え……え？」

「くす……なんて、うちの事をあなたに言ったと清桜に知られたら、怒られますしね。やめておきましょう。ただ、俺で7代目になりますただけはお教えます」

「そうですか……」

「いつかあなたにもお話しできればいいんですけどね。もう少し大人になってからということだ」

「うう、気になるようなでも怖いような……」

「では、副会長の件、考えておいてください」

「はい」

次期副会長。卒業。進路。僕の中で、様々なことが渦を巻いている。僕だって、進むべき道つてのがあるんだ。今まで人の言いなりだったけど、これからはきっと、自分で決めていかないといけないんだ。僕が進みたい道。まだ1年生だけど、時間がたつのは長いようで短いもの。もう、そろそろ簡単にでも決めないといけない。子供のころから小説家になりたいとは思ってたけど、今の僕がやりたいうこと、進路をしっかりと定めないとだめなんだろう。

生徒会室から出て、階段を降りようとした時だった。その階段の上の方から人のどなる声が聞こえてきた。どなっているけど、それに混じって鳴き声も聞こえる。その声が、聞き覚えのある声だったからだろうか、自然と足がそのほうに向かってしまった。

あまり来たことはないけど、屋上は洋風の庭園になってるって清ちゃんが言ってた。その通りだった。西洋風のバラのアーチャ、噴水、彫刻なんかも隅の方にある。いまだに聞こえるとなり声。だけ

どどんな内容かはよくわからない。屋上に吹く冷たい風が、どなり声をかき消すように吹いている。いけないと思いつつも、なぜか僕の歩みは止まらなかった。そして、白いバラの茂みの影に、その人の姿を見つけた。きれいに手入れされた芝生の上に座り込んで、今まで誰かと話していたのか、携帯を持った片手はその人の膝の上に力なくあつた。そして、僕に気付いたその人は、ゆっくりと振り向いた。西の空に沈む夕日が、その人のこぼす大粒の涙を、茜色に照らしあげていた。

*** 4 5 * (後書き)**

いろいろな問題が次々浮上してくる話の展開。

しかもこの話だけでなく、リンクしてる作品にもそれは共通してるもので……

もつとに小屋かほのぼのって感じにはいかないのかとも思います。
ドロドロって……。

その人は、僕だとわかったとたん、その腰を上げて僕に抱きついてきた。膝で立ち、僕のお腹に顔をうずめて泣いていた。どうしたらいいかわからない僕は、少し戸惑った。だけど、いまだ泣き続けているその人をなだめようと、そつとその人の柔らかな栗色の髪をなでた。

「あの……静香……先輩？」

「つく……うう……」

嗚咽を漏らして、さらに力強く僕の背中に腕を回す静香先輩。なで泣いてるのとか、何があつたんだろうとか、どうしようとかいふようなことを考えてるけど、何にも答えは見つからない。ただ、頭をなでることしかできずにいた。いつも笑ってて、なんでもできるそんな姿ばかり見てたから、静香先輩の泣いたところなんて初めてで、この人が泣いてるのが信じられないでいる。どうしよう。僕じや何もできない。世間知らずで、こんなときどうすればいいのかわからないんだから。僕じゃ静香先輩の力にはなれない。

「静香先輩、泣かないください。僕誰か呼んできますから」

「いいっ……夕貴君……しばらくこうしててっ……」

「あ……はい」

静香先輩が泣きやんだのは、それから数分たった後だった。今はそばにあつたベンチに並んで座っている。目が真っ赤になった静香先輩は、指で涙をぬぐうと、少しはにかんだ。

「ごめんね、いきなり。困らせちゃったね。もう大丈夫だから」

「いえ……何もできなくてごめんなさい」

「うつん、久しぶりに頭なでられてちよっと落ち着けたよ」

「なら……よかったです」

「だめだなあ。何にも言い返せなくて、悔しくて泣くなんて情けない」

「誰かに、いじわる言われたんですか？」

「まあ、そんなとこかな」

「さっきどなつてたのは、その人に……」

「……聞いてた？」

「風で何言っているかまでは聞こえませんでした。ごめんなさい、そんなつもりはなかったんですけど、声に聞き覚えあつて気付いたら勝手に……」

「謝らなくていいから。大した会話してないし。最後は怒つてきつちやつたしね。……ねえ、一個聞いていい？」

「はい？」

「夕貴君は……清桜のこと好き？」

「え……な……ななな何をいきなり……」

そんな思いもよらない質問をされて、顔が瞬時に熱くなる。きつと真つ赤だろう。さっきの話と何の関係もなさそうな気もするけど、静香先輩の目は真剣。これは、こたえなければいけないのかもしれない。

「……はい……」

「そう。そっか……。まだ、そのことは清桜には……」

「言えてません……」

「でも、言つ気はあるよね？」

「それはもちろん……でも最近会えてないので……」

「そっか、言えるといいね。応援してるから頑張つて」

「はい……じゃ、僕もう帰ります」

「うん、またね」

「はい」

ベンチから立ち上がり、帰ろうと歩く。ふと、歩みを止め振り返る。

「夕貴君？」

「あの、僕……よわっちくて、全然頼りにならないかもしれませんけど……。でも、静香先輩泣いてるの嫌です。……だから、僕にできることなら……力になりたいです……。ほんと、頼りがいないかもしれないですけど……。僕でいいなら、力にならせてください」

「……うん。あ、そうだ、じゃあさ今度の土曜日僕に付き合ってくれる？」

「土曜日ですか？別に何もないのでいいですけど……どこへ？」

「んふふ、秘密。楽しみにしてて」

「はい」

柔らかに笑った静香先輩の姿を見て、安心した僕は寮へと帰った。

* 4 6 * (後書き)

少しは誰かのために頑張ってみようと思った夕貴だと思いますね。

次は静香先輩とデートかな？(そうなの？)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9539u/>

夕日よ昇れ

2012年1月12日19時56分発行